

津阪東陽『杜律詳解』 訳注稿 (十)

二宮俊博

本稿には、津阪東陽『杜律詳解』巻中の「撥悶」から「白帝城最高楼」詩までを収める。原文の「ノ」は「シテ」に、「」は「コト」に、「厶」は「トモ」にそれぞれ改めた。明らかに訓点脱落していると思われる箇所には、これを補った。また詩句の左傍にところどころ附されている和訓は、※をつけて改行して示した。書き下し文は、紙幅の都合で省略する。なお、詩題の上には便宜的に通し番号を施した。

- 073 撥悶
074 諸將五首 (其一)
075 (其二)
076 (其三)
077 (其四)
078 (其五)
079 十二月一日三首 (其一)
080 (其二)
081 (其三)
082 白帝城最高楼

073 撥悶

※撥：ハライノケル

撥音鉢、除也。悶、煩鬱也。案スルニ年譜^(注2)、永泰元年四月、嚴武卒ス。未幾^(注3)、崔旰反シテ寇ス成都^(注4)。五月、公避^(注5)レ亂南^(注6)下^(注7)、自^(注8)戎州^(注9)至^(注10)渝州^(注11)。六月、至^(注12)忠州^(注13)。秋至^(注14)雲安^(注15)居^(注16)之^(注17)。此蓋在^(注18)忠州^(注19)將^(注20)下^(注21)雲南^(注22)、因憶^(注23)其有^(注24)美酒^(注25)、至^(注26)則得^(注27)快飲^(注28)、庶幾^(注29)可以消愁^(注30)矣。古詩^(注31)所^(注32)云、何^(注33)以解^(注34)憂^(注35)、惟有^(注36)「杜康」。故^(注37)以^(注38)撥悶^(注39)命題^(注40)、預^(注41)想^(注42)而遣^(注43)興^(注44)也。

(注1) 例えは、『正字通』に「悶、莫困の切。門の去声。煩鬱なり」と。

(注2) 明・単復の年譜。永泰元年の条に「四月、嚴武卒す。五月、遂に蜀を離れて南に下る。戎州自^(注3)り渝州に至る。六月、忠州に至る。秋、雲安に至つて之に居る」と。宇都宮遼庵の増広本に挙げる。戎州は、今の四川省宜賓市。渝州は、重慶市。忠州は、重慶市忠県。

(注3) 崔旰については、訳注稿(一)、「杜文貞公伝」に「永泰元年、武卒す。公、依る所無し。属たま崔旰乱を作し、蜀大いに擾る」とあり、その(注56)参照。なお、旰は旰の訛字。

(注4) 三国魏・曹操「短歌行」(『文選』巻二十七)の第七・八句。杜康は、酒作りの名人の名から転じて酒をいう。なお、この二句は、顧宸「註解」

に（注10）に挙げた箇所が続けて「自嘲自遣、所云何を以て以て憂を解かん、惟だ杜康有るのみと、正に此の意なり」として、これを引く。『註解』は宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔撥〕、字音は鉢、除である。〔悶〕は、煩鬱である。年譜を案ずるに、永泰元年（七六五）四月、嚴武が卒した。ほどなく崔旰〔旰〕が反し、成都を寇した。五月、公は乱を避けて南に下り、戎州から渝州に至った。六月、忠州に至った。秋に雲安に至り、ここに居住した。これはけだし忠州にあつて、まさに〔雲南〔安〕〕に下ろうとして、それでその美酒あるを憶い、行きつけば快飲できよう、どうか〔愁を消〕したいものだと思つてゐる。古詩にいわゆる「何を以て憂を解かん、惟だ杜康有るのみ」である。されば〔撥悶〕をもつて題に名づけ、あらかじめ想像して気晴らしをするのである。

聞道雲南、麴米春 纔傾一盞即醺人

道、言也。聞、道傳聞人所言也。雲南、縣名。明、時夔州府、雲陽縣。麴音掬。麴米春、酒名。唐人多以春名酒、酒、如松醪春、石凍春。詳見東坡志林。一盞即醺、極言醇美也。

〔注5〕〔南〕字、各本は〔安〕に作る。

〔注6〕訳注稿(五)、024「別れを恨む」詩の詳解に「道は言なり。道ふを聞くは、人の伝説を聞くなり」とあり、その（注25）参照。

〔注7〕邵宝『集註』（卷二十二、述懷類）に「雲安は県の名。今、夔州府の雲陽県」と。宇都宮遷庵の両著にも挙げる。ちなみに、『大明一統志』卷七十、夔州府・雲陽県の条に、「後周、雲安県と改む。唐、夔州に属す」と。今の重慶市雲陽県。

〔注8〕邵傳『集解』に「麴米春」の下に「酒の名。唐人多く春を以て酒に名づく」と注する。麴は麴の別体字。

〔注9〕訳注稿(七)、046「野望」詩の（注24）参照。

〔道〕は、言である。〔道ふを聞く〕は、人の言うところを伝聞するのである。〔雲南〔安〕〕は、県の名。明代は夔州府の雲陽県。〔麴〕、字音は掬。〔麴米春〕は、酒の名。唐人は多く春をもつて酒に名づけ

た。松醪春・石凍春のような例がある。詳しくは『東坡志林』に見える。一盞（即ち醺ず）は、醇美なることを力説するのである。

乗舟取醉、非難事。下峽消愁、定幾巡。

乗、舟二下、峽、極、是險艱、反、爲、非、難、事。欲、造、彼、之、急、便、作、此、虛、想。至、則、得、數、澆、壘、塊、非、止、一、醉、而已。故、曰、定、幾、巡。

〔注10〕顧宸『註解』に「題は是れ悶を撥す、現前に酒有り、尚ほ未だ撥し易からず。乃ち舟に乗り峽を下つて、以て險遠を歴せんと欲す。至難の中従り虚想を作して、反つて難に非ずと称す」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔注11〕『世説新語』任誕篇に「王大（王忱）曰く、阮籍は胸中に壘塊有り、故に酒を須ひて之を澆ぐ」と。

〔注12〕定は、下に疑問詞があると、果たして、結局の意。

〔舟に乗〕つて〔峽を下〕るのは、極めて危険をともし難儀であるのに、かえつて〔難事に非ず〕とする。彼の地に至らんとするの急なあまり、このありもしない想像をなした。行きつけばたびたび胸中の壘塊に澆ぐことができよう、ただ一酔にとどまらないのだ。それゆえ〔定めて幾巡〕という。

長年三老遙憐汝 振柁開頭捷有神

※長年：センドウ 三老：オヤカタ 遙：ノラヌサキカラ 憐：ヒソウスル 柁：カザ 頭：ヘサキ 捷：ニテバヤキコト

長上聲。此亦當句對格。薛益分類、峽中以篙師爲長年、柁工爲三老。凡欲發船、則振柁尾、船頭便開。朱鶴齡輯註、川中人以掌三前梢爲開頭、今名看頭。然則振柁屬三老、開頭屬長年矣。蓋主三船頭用二年長練習者、故曰長年。就中三最老者推之、司柁者。其人不過三四輩、故尊之曰三老。輟耕錄云、吾鄉稱一舟人之老者曰三老。又海船中以司柁曰三老。皆推一船之最尊者言之。是亦長年三老之意也。憐親愛也。曰遙憐、

た。松醪春・石凍春のような例がある。詳しくは『東坡志林』に見える。一盞（即ち醺ず）は、醇美なることを力説するのである。乗舟取醉、非難事。下峽消愁、定幾巡。乗、舟二下、峽、極、是險艱、反、爲、非、難、事。欲、造、彼、之、急、便、作、此、虚、想。至、則、得、數、澆、壘、塊、非、止、一、醉、而已。故、曰、定、幾、巡。〔注10〕顧宸『註解』に「題は是れ悶を撥す、現前に酒有り、尚ほ未だ撥し易からず。乃ち舟に乗り峽を下つて、以て險遠を歴せんと欲す。至難の中従り虚想を作して、反つて難に非ずと称す」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。〔注11〕『世説新語』任誕篇に「王大（王忱）曰く、阮籍は胸中に壘塊有り、故に酒を須ひて之を澆ぐ」と。〔注12〕定は、下に疑問詞があると、果たして、結局の意。〔舟に乗〕つて〔峽を下〕るのは、極めて危険をともし難儀であるのに、かえつて〔難事に非ず〕とする。彼の地に至らんとするの急なあまり、このありもしない想像をなした。行きつけばたびたび胸中の壘塊に澆ぐことができよう、ただ一酔にとどまらないのだ。それゆえ〔定めて幾巡〕という。長年三老遙憐汝 振柁開頭捷有神 ※長年：センドウ 三老：オヤカタ 遙：ノラヌサキカラ 憐：ヒソウスル 柁：カザ 頭：ヘサキ 捷：ニテバヤキコト 長上聲。此亦當句對格。薛益分類、峽中以篙師爲長年、柁工爲三老。凡欲發船、則振柁尾、船頭便開。朱鶴齡輯註、川中人以掌三前梢爲開頭、今名看頭。然則振柁屬三老、開頭屬長年矣。蓋主三船頭用二年長練習者、故曰長年。就中三最老者推之、司柁者。其人不過三四輩、故尊之曰三老。輟耕錄云、吾鄉稱一舟人之老者曰三老。又海船中以司柁曰三老。皆推一船之最尊者言之。是亦長年三老之意也。憐親愛也。曰遙憐、

者ハ、時尙未^レ就^レカ^二舟^一而先預^二想^一也。^(注20) 捩力結反、轉^{スル}也、拗也。舵徒可反、正^ス船^ヲ木設^ク於^二船尾^一。^(注22) 頭ハ即^ニ艫也。捷^{コト}有^レ神、贊^ニ其操^{コト}舟^ヲ敏捷、陵^レ危避^レ險、間不^レ容髮、神機在手、奇警絶妙^ヲ也。蓋捩舵開頭遇^ニ險^一迴避之狀、峽水飛奔、舟迅^{コト}如^レ矢、惡難危巖、戰兢喪^レ魄、若操^{コト}舟才^ニ失^ハ、立^ト轉覆^ス。故^ニ非^レ捷^{コト}有^レ神者^ニ、不^レ可^ニ以冒^ス險^一也。此聯申^ニ言^一前聯^ヲ、下^レ峽所^三以^二非^ニ難事^一者^ハ、憑^ニ妙手行^レ舟之神捷^{ナル}也。四句一直^ニ下^ル、皆想像之樂、所^ニ以撥^レ悶^一也。此殆所^レ謂^ニ畫餅充饑、望^ニ梅^一止渴^ヲ、出^ニ於極悶悶之餘^一耳。

(注13) 〈舵〉字、錢注(卷十四)および輯註(卷十二)は〈施〉に作る。音義同じ。

(注14) 後出の(注18)に引く明・陶宗儀『輟耕錄』に見える。ながいの意のときは平声。年長ける、おさの意のときは上声。

(注15) 訳注稿四、014「曲江酒に對す」詩の領聯「桃花細やかに楊花を逐つて落ち、黃鳥時に白鳥と飛ぶ」の詳解に「句中各自對偶を為す、之を當句對と曰ふ」と。その(注12)参照。

(注16) 薛益『分類』(卷一、述懷)に「長年三老は、川中、舟師を呼ぶ名。峽中、篙師を以て長年と爲し、舵工を三老と爲す。凡そ船を發せんと欲せば、則ち舵尾を捩轉すれば、船頭便ち開く」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

(注17) 輯註(卷十二)に「李実が曰く、川中の人、前梢を掌るを以て開頭と爲す。今、看頭と名づく」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

ちなみに李実については、輯註の卷一目錄に「遂寧の李実」とその名が見える。錢仲聯『清詩紀事』(二)明遺民卷(上海古籍出版社、一九八七年)および謝正光・范金民編『明遺民錄彙輯』(南京大學出版社、一九九五)に拠れば、字は如石。明の崇禎十六年(一六四三)の進士。

(注18) 明・陶宗儀『輟耕錄』卷八、長年の条に「吾が郷、舟人の老者を稱して長老と曰ふ。長は上声。蓋し唐已に之有り矣。杜工部が詩に云ふ、〈長年三老歌声の裏、白昼に錢を攤す高浪の中〉と。古今詩話に謂ふ、〈川峽篙手を以て三老と爲す。乃ち一船の最も尊き者を推して之を言ふ〉と。因つて思ふ海舶の中、司舵を以て大翁と曰ふ。是れ亦た長年三

老の意なり」と。杜甫の作は、「夔州歌、十絶句」其七(詳註卷十五)。「古今詩話」は、宋・李頎撰。郭紹虞『宋詩話輯佚』に輯本がある。『輟耕錄』には、承応元年(一六五二)刊の和刻本があり、汲古書院刊の『和刻本漢籍隨筆集』第二集にその影印を収める。

(注19) 邵傳『集解』には〈憐〉字の下に「愛也」と注する。

(注20) ちなみに、明・王嗣夷『杜臆』に「汝は麴米春を指す。言ふころは舟子も亦た酒を憐れみて捷く往くなり」とし、それを踏まえて、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(卷十四)は「通憐汝」について、「遙とは忠州は夔州よりずつと手前なればいふ、汝は麴米春をさす」とし、この頸聯を「長年も三老ももうとほくから汝(酒)を愛してをり、早く飲もうとおもうて船頭を開くにも舵をあやつるにもすばやいこと非常なものだ」と解する。

(注21) 『集韻』に「力結の切」と。

(注22) 『字彙』に「舵は、待可の切。船を正す木なり。船尾に設く」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注23) 顧宸『註解』に「四句一直に下る、而して曲折自づから寓す」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注24) 顧宸『註解』に「聞道」と曰ひ、〈當令〉と曰ふ、総て是れ遙かに想ひ此れを以て悶を撥ふ。殆ど所謂画餅饑に充て、梅を望んで渴を止む、牢落無聊亦た甚だし矣」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〈画餅饑に充つ〉は、『三國志』卷二十二、魏書、盧毓伝に見える文帝(曹丕)の詔に「選舉に名有るを取ること莫かれ。名は地に画いて餅を作るが如し、啖ふ可からざるなり」とあり、〈梅を望んで渴を止む〉は、『世說新語』仮譌篇に「魏武(曹操)行役して汲道を失す。軍皆渴く。乃ち令して曰く、前に大梅林有り、子饒く甘酢、以て渴を解く可しと。士卒之を聞き、口皆水を出す。此れに乗じて前源に及ぶを得たり」というのに基づく。

〈長〉は上声。これもやはり当句對の格。薛益の分類に「峽中では篙師を長年とし、舵工を三老とする。すべて船を發しようとする場合、舵尾を捩轉すれば、船首はすぐに開く」、朱鶴齡の輯註に「川中の人、前梢を掌るを以て開頭とし、今、看頭と名づく」と。だとす

れば「捩舵」は「三老」に属し、「開頭」は「長年」に属することに
なる。けだし船首を主するには年長け熟練の者を用いるので、それゆ
え「長年」という。とりわけ最も老練な者をば推挙して舵を司らせ
る。そのような者は三四名に過ぎず、それゆえこれを尊んで「三老」
という。『輟耕錄』に云う、「吾が郷里では、舟人の老練な者を称し
て長老という。さらに外洋船で司舵を大翁という。いずれも一船の
最も尊き者を推挙してこれを言う。これもやはり長年三老の意であ
る」と。「憐」は、親愛である。「遙かに憐れむ」というのは、時に
なおまだ舟に就かぬうちから先ずあらかじめ想像するのである。

「捩」は、力結の反。転である、拗である。「舵」は、徒可の反。船
の方向を正す木で船尾に設ける。「頭」は、とりもなおさず艫であ
る。「捷きこと神有り」は、その操船の敏捷にして、危険を陵ぎ難所
を避け、間髪を容れず、臨機応変の対応は手の内にあり、機敏で絶
妙なることを讃えるのである。けだし「舵を振り頭を開」き、難所
に遭遇して廻避するありさまは、峡水が飛奔し、舟の迅きこと矢の
ごとく、悪灘危巖にびくびくとおののいて肝を潰し、もし操船が
ちよつとでも失敗すると、たちどころに転覆する。それゆえ「捷き
こと神有る」者でなければ、危険を冒すことはできないのである。

この聯は前聯を引き伸ばして言い、「（峡を下る）のが難事ではないわ
けは、手だれの舟を操る神技的な捷さによるのである。この四句は
まっすぐに説き下し、どれも想像の楽しみが「悶を撥ふ」ゆえんで
ある。これはほとんどいわゆる絵に描いた餅を飢えに充て、梅を望
んで渴きを止めるというもので、極めて悶々のあまりに出たものな
のだ。

已^レ辨^二青錢^一防^二顧直^一 當^レ令^三美味^一入^二吾脣^一

※防^二テアテス^一 顧直^二ヒヨウチン^一

防^ハ預^シ備^フ也。顧^ハ與^レ雇^同。出^レ錢^役人曰^レ顧^ト。直音治、價
也。顧直^ハ雇^レ人^ノ之直錢。若^レ今言^二工賃^一也。或^レ謂^二顧^ハ工賃^一、直^ハ

酒直^{注27}、鑿^リ矣。此促^二舟師^一之辭。蓋公有^下不安^二于忠州^一者^{注28}、
因戲^二託^レ酒^一狂言^{スル}耳。

〔注25〕「顧」字、錢注および輯註は「雇」に作る。

〔注26〕例えば、「正字通」の値の条に「持世の切。音治」とあり、「又た物価
を値と曰ふ。或いは直に作る」と。

〔注27〕邵傳「集解」に「顧は以て船に賃す、直は以て酒を沽ふ。蓋し両事な
り。止だ船を顧するのみに非ざるなり」と。

〔注28〕邵傳「集解」に「此れ雲安に往かんと欲するの先、雲安の酒に託して
名と為す。殆ど忠渝に安んぜざる者なり」と。

「防」は、預め備へることである。「顧」は、雇と同じ。錢を出して
人を使役するのを「顧」という。「直」、字音は治、價である。「顧直」
は、人を雇う直錢。今の工賃と言うようなものである。或いは「顧」
は工賃で、「直」は酒直だというのが、穿鑿しすぎだ。これは舟師を促
す辞。けだし公は忠州に心安んぜざることがあって、それで戯れに
酒に託してたわけた物言いをしているのだ。

074 諸將五首

言^二當時諸將之事^一。皆出^二於憂^レ國^一之餘^一。永泰元年在^二雲南^一作^レ
也。沈歸愚云、五章議^二論^一時事、慷慨蘊藉、而于^二每篇^一結語^二丁
寧反覆^一。所謂言^レ之者無^レ罪而聞^レ之者足^二以戒^一也。

〔注1〕顧宸「註解」に「此の詩は乃ち永泰元年、雲安に在りて作る」と。宇
都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注2〕沈德潛「杜詩偶評」（卷四）に「五章時事を議論して、感慨淋漓、而し
て辭氣仍は出し、以て丁寧反覆す。所云之を言ふ者罪無くして之を聞く
者以て戒しむに足るなり」と。『唐詩別裁』（卷十四）も同じ。但し、楊
倫「杜詩鏡銓」（卷十三）に引くところでは「感慨淋漓」を「慷慨蘊藉」
に、「所云」を「所謂」に作る。「之を言ふ者」云々は、『詩經』周南・閟
帷の序（毛詩大序）に「之を言ふ者は罪無くして之を聞く者は以て戒む
るに足る」と。

当時の「諸將」のことを言う。いずれも国を憂えるあまりに出てい

る。永泰元年（七六五）、雲南「安」での作である。沈帰愚が云う、「五首は時事を議論して、慷慨し含蓄があり、毎篇の結語においてねんごろに反覆する。いわゆる『之を言ふ者は罪無くして之を聞く者は以て戒むるに足る』というものである」と。

其一

此首慨吐蕃之難^一、是當時第一大患。末贊^二郭子儀^三、是諸將中、第一人、所以首言^四之也。或謂前六句追傷^五祿山之亂^六、非是^七。因不詳^八當時事蹟^九而誤也。

（注一）輯註（卷十三）に「前四句追つて祿山潼関を破る時を言ふ。〔玉魚〕〔金鑑〕は往事を援いて以て之を戒むるなり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

この一首は吐蕃の難を慨嘆する。これは当時第一の大患であつた。末尾に郭子儀を讃えるが、これは〔諸將〕中の第一人者で、最初に取り上げて言うゆえんである。或いは前六句は追つて安祿山の乱を傷むというのは、よくない。当時の事蹟を詳らかにしないことから誤まるのである。

漢朝^一陵墓對南山^二 胡虜千秋尙入關^三

南山^四終南山^五。長安志^六終南山連互^七藍田諸縣^八爲^九長安之固^{一〇}。西漢諸陵及大臣^{一一}墓多^{一二}與^{一三}之相對^{一四}。虜音魯^{一五}。胡虜^{一六}指吐蕃^{一七}。千秋與南山^{一八}通^{一九}氣用^{二〇}之^{二一}、反^{二二}觀^{二三}胡虜入^{二四}關^{二五}。尙者不^{二六}可^{二七}然^{二八}而能然^{二九}之辭^{三〇}。此嘆^{三一}陵墓遭^{三二}焚毀^{三三}、故^{三四}下復申^{三五}言^{三六}玉魚金鑑^{三七}事^{三八}。蓋諸帝^{三九}陵墓皆在^{四〇}內地^{四一}、前^{四二}直^{四三}南山^{四四}、要害堅固、所謂關中四塞^{四五}、千秋足^{四六}恃^{四七}。而胡虜尙入^{四八}關^{四九}、肆^{五〇}其發掘^{五一}、橫行蹂躪^{五二}、如^{五三}入^{五四}無人之境^{五五}、何^{五六}邪^{五七}。恨^{五八}其不^{五九}能^{六〇}守^{六一}而怪^{六二}嘆^{六三}之^{六四}也。時吐蕃之寇^{六五}、無^{六六}歲^{六七}不^{六八}入^{六九}關^{七〇}、遂^{七一}陷^{七二}京師^{七三}。代宗出奔^{七四}陝州^{七五}。太常博士柳伋^{七六}上疏^{七七}言^{七八}犬戎度隴^{七九}不^{八〇}血^{八一}刃^{八二}而入^{八三}京師^{八四}、劫^{八五}宮闕^{八六}焚^{八七}陵寢^{八八}事^{八九}上。臣子不^{九〇}忍^{九一}斥言^{九二}、故^{九三}託^{九四}之漢朝^{九五}陵墓^{九六}也。舊解^{九七}胡虜^{九八}指^{九九}安祿山^{一〇〇}、殊^{一〇一}無^{一〇二}

干涉^{（注9）}。

（注2）邵傳『集解』に南山の下に「終南」と注する。また邵宝『集註』（卷十二、將相類）および薛益『分類』（卷一、將相）に「南山は、終南山なり」と。『集註』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

（注3）北宋・宋敏求『長安志』卷十一、万年県の条に「終南山は県の南五十里に在り、藍田県界自り西のかた県界に入る」とあるが、ここに挙げるような箇所は見あたらない。

（注4）例えば、『字彙』に「虜、郎古の切、音魯」と。ちなみに、リヨは慣用音。

（注5）釈大典の『詩語解』巻下、猶・尙の条に「又不^レ可^レ然^レ而能^レ然^レ之辭」と。

（注6）『史記』巻七、項羽本紀に「関中、山河を阻み、四塞」と。また『漢書』卷三十一、項籍伝に「関中は山を阻し河を帯び、四塞の地」と。四塞とは、東の函谷関。南の武関、西の散関、北の蕭関をいう。

（注7）顧宸『註解』に「漢朝を借りて以て今日を傷む。正に広徳元年吐蕃入りて寇す、太常博士柳伋上疏して以て爲^レ犬戎隴を度り刃に血せずして京師に入り、宮闕を劫やかし陵寢を焚するの事を指す」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。『資治通鑑』卷二三三、唐紀三九、代宗の広徳元年（七六三）九月の条参照。

ちなみに、柳伋「程元振を誅せんことを請ふ疏」（『全唐文』卷四十七）に「独り犬戎数万の師有り、関を犯し隴を度り、秦渭を歴し鄠涇に牧し、曾て刃に血せずして、直ちに城闕に入り、館穀は三載あるに向んとし、縣地は数し千里を踰ゆ。謀臣は陛下の爲に一言を陳べず、武士は陛下の爲に一戦を效さず、各おの卒伍を携へ、関閭を剽劫し宮闕を汗辱し陵墓を焼焚する者は何の故ぞ。此れ將帥の心、陛下に叛けばなり」云々とある。〔館穀〕は、敵兵が館舎に侵入してその糧穀を食うこと。『左伝』僖公二十八年に見える。〔縣地〕は、広々と続く土地。『後漢書』西羌伝に「縣地千里」と。

（注8）『杜詩偶評』に「此れ吐蕃内侵し、諸將禦侮すること能はざるが爲に作るなり。斥言するに忍びず、故に漢を借りて此れを爲す」と。斥言は、あからさまに指さして言う。

なお、宇都宮遯庵の増広本は、輯註の「祿山長安に入り、諸陵必ず焚

毀せ遣る。公斥言するに忍びず、故に之を漢朝の陵墓に託す」というのを、また詳説は、張遠『会粹』（卷十五）の同様の注を引く。

（注9）顧宸『註解』に「旧註に胡虜は安祿山を指すと。殊に干涉無し」と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

《南山》は、終南山。『長安志』に「終南山は藍田の諸県につらなつて長安の固めである」と。西漢の諸陵および大臣の墓は多くこれに向き合っている」と。《虜》、字音は魯。《胡虜》は、吐蕃を指す。《千秋》は、《南山》と氣脈を通じて用い、《胡虜》《関に入る》に對比して際立たせている。《尚》とは、そうあつてはいけないのにそうであるという辞。これは《陵墓》が焼き打ちに遭うのを嘆じ、それゆえ下に再び《玉魚》《金盃》の故事を引き伸ばして言う。けだし諸帝の《陵墓》は、いずれも畿内の地にあり、前面は《南山》にあたり、要害堅固な、いわゆる関中の四塞で、《千秋》恃むに足る。しかるに《胡虜》は《尚ほ関に入る》り、その発掘をほしいままにし、横行蹂躪して、無人の境に入るがごとくであるのは、どうしてなのか。その守ることができないのを恨んで訝しみ嘆くのである。当時、吐蕃の入寇がない歳はなかった。広徳元年（七六三）、長驅して《関に入る》り、そのまま京師を陥れ、代宗は陝州に出走した。太常博士の柳伉の上疏に、「犬戎が隴を度り刃に血ぬらずして京師に入り、宮闕を劫やかし陵寢を焚いた」ことを言う。臣子たるものあからさまに言うのに忍びず、それゆえこれを漢朝の陵墓に託するのである。旧解に《胡虜》は安祿山を指すとするが、まったく関わりがない。

昨日玉魚蒙_リ葬地_ニ 蚤時金盃出_二人間_一

※蚤時：ハヤサズ

此嘆_ニ陵墓之遭_レ發_カ也。西京雜記_{（注10）}漢ノ楚王戊ノ太子卒_ス于京師_ニ。天子賜_二玉魚一雙_一以斂_ス。唐ノ高宗建_二宣政殿_一改葬掘_レ墓_ヲ、棺柩ハ略盡_ニ、玉魚宛然_{トシテ}見_ニ在_一。蚤與_レ早通_ス。蚤時ハ猶_レ言_二即時_一、謂_レ不_レ經_二時日_一也。盃ハ小孟也。漢武故事_{（注11）}鄴縣有_一人_二于市_一貨_二玉

杯_ヲ者_一。吏疑_ニ其御物_一ヲ、欲_レ捕_レ之_ヲ、因_ニ忽_レ不_レ見_一、縣送_ニ其器_一ヲ、推問_ニ乃武陵中_一物也。霍光自呼_レ吏問_レ之_ヲ、說_ニ市人_一ノ形貌_ヲ、如_ニ先帝_一云。南史沈炯傳_{（注12）}載_二行經_一武帝_ノ通天臺_ヲ爲_レ表奏_ニ、其略_一曰、甲帳珠簾一朝零落_ニ、茂陵_ノ玉盃遂_ニ出_二人間_一。即此事也。以上有_二玉魚_一字_ヲ易_レ作_二金盃_一。搜神記_{（注13）}盧充因_レ獵_ニ入_二崔少府_一墓_ニ、與_二其小女_一婚_ス。留_ニ三日_一、後三年、女抱_レ兒還_ニ充_一、又與_二金盃_一、俄_ニ不_レ見_一。充詣_ニ市_一賣_二盃_一。崔女姨母見_レ之_ヲ曰、昔吾妹嫁_ニ崔少府_一、有_レ女未_レ笄_ニ而亡_一。吾痛_レ之_ヲ、贈_ニ一金盃_一、著_ニ棺中_一。今視_ニ卿_一盃_ヲ甚_ニ似_一。此非_ニ陵墓_一所_ニ引_一、只借_ニ用_一其語_ヲ、替_ニ茂陵_一玉盃_ヲ。胡元端云_{（注14）}、以_二金盃_一字_ヲ入_ニ玉盃_一語_ニ。一句中事詞貫用_ニシテ、兩_ノナカラ無_ニ痕迹_一。如_ニ伯夷傳_一雜_ニ取_二經史_一、鎔液_ニ成_レ文_一、正_ニ此老爐_一鍾_ニ妙處_一。此說得_レ之_ヲ。兩句須_ニ合_一看_ス。蓋玉魚金盃交互_ニ爲_レ文_一。諸陵及貴人_ノ墓、皆爲_ニ寇盜_一所_ニ掘_一發_ニ。殉葬_ノ御物、盡_ニ出_二於人間_一也。曰昨日曰蚤時、傷_ニ葬埋_一纔_ニ畢_一即遭_ニ發掘_一也。

（注10）錢注（卷十五）および輯註に挙げる『西京新記』に、「宣政門内を宣政殿と曰ふ。初めて成るとき、毎に數十騎馳突して出づるを見る。高宗、巫祝の劉明奴をして其の由る所を問はしむ。鬼曰く、我は漢楚王戊の太子なり。死して此に葬らる。明奴曰く、漢書を按ずるに戊は七国と反し、誅死して後無し。焉んぞ此に葬むるを得んや。鬼曰く、我れ當時入朝し、路遠きを以て随坐せず。病みて死す。天子此に我を葬むる。漢書は自ら遺誤する耳。明奴因つて詔を宣し、改葬せんと欲す。鬼曰く、出入誠に安んぜず、改葬されば幸甚なり。天子我に玉魚一双を斂す、と。発掘するに及び、玉魚宛然たり、棺柩略は尽く」と。

なお宇都宮遼庵の増広本には、輯註を引くが、《新記》を誤つて《雜記》に作る。『西京新記』は、唐・韋述撰『兩京新記』のこと。また『唐詩貴珠』（卷二十二、国事一）にも『西京雜記』として同様の話を挙げるが、やや異同がある。

（注11）例えば、『字彙』に「盃、烏管の切。腕の上声。小孟なり」と。盃は、碗と同じ。

〔注12〕 輯註に「按ずるに漢武故事に鄴県に一人の市に于いて玉杯を賣る者有り。吏其の御物ならんを疑ひ、之を捕へんと欲す、因つて忽ち見えず、

其の器を送り、推問するに乃ち武陵中の物なり。霍光自ら吏を呼び之を問ひて、市人の形貌を説かしむ。先帝の如しと云ふ」と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。なお、『漢武故事』は、『太平御覧』卷八十八、皇王部十三、孝武皇帝の条に引くのに拠る。なお、同書卷七五九、器物部四、杯の条にも引くが、鄴を鄴に作る。

〔注13〕 輯註に「南史に沈炯、魏の虜はる所と為り、嘗て独行して漢武の通天台を經、表を為りて之を奏す。其の略に曰く、甲帳珠簾一朝零落し、茂陵の玉盤遂に人間に出づ」と。即ち此の事なり。然れども玉を易へて金と為す、義に未だ安んぜざる有り。此れ空しく餘して金盤出づと。蓋し皆盧充の事を借用す」と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。『南史』は卷六十九、沈炯伝。

〔注14〕 晋・干宝『搜神記』卷十六。ここには、その節略を挙げる。

〔注15〕 明・胡應麟『詩數』外編卷四、唐下に「杜が諸將の詩に（昨日玉魚葬地に蒙り、早時金盃人間に出づ）と。説く者謂へらく杜は本と茂陵の玉盤遂に人間に出づの語を用ふ、上に玉魚の字有るを以て、遂に易へて金盤と作す、と。或いは謂へらく盧充幽婚自ら金盤の事有り、杜応に原文を竄易すべからず。然るに單に盧充を主とせば、又た汗漫に落つ、と。

二説今に迄つて紛拵す。知らず杜蓋し金盤の字、玉盤の語に入るを以て、一句中事詞串用す。兩つながら痕迹無し。伯夷伝に絰子を難へ取り、鎔液文を成すが如し。正に此の老の爐鍾の妙処、而して注家坐して之を失す」と。度会末茂『杜詩評叢』にも挙げる。汗漫は漠然として捉えどころがないさま。爐鍾は精鍊。後出078「諸將」其五の（注1）参照。〔注16〕 宇都宮遼庵の詳説に「玉魚金盤ヲ分テ云ハ、互」文ノ法也。兩句合セテ可レ見」と。

これは陵墓があはかれるのを嘆くのである。『西京雜記』に「漢の楚王戊の太子が京師に卒した。天子は一对の（玉魚）を賜ひ棺に納めた。唐の高宗が宣政殿を建て改葬するため墓を掘ると、棺柩はあらかた朽ち果てていたが、（玉魚）はそのまま変わらなずに残っていた」と。〔蚤〕は、早と通ずる。〔蚤時〕は、即時と言ふのとほぼ同じで、

時日を経ないことである。〔盃〕は、小盃（小さなはち）である。『漢武故事』に「鄴県に市場で玉杯を売りに出している者がおり、警吏が御物ではないかと疑ひ、捕らえようとしたら、すぐさま忽然と姿が見えなくなった。県ではその器を朝廷に送り、推問するとなんと武陵中の品物であった。霍光が自ら吏を呼んで問ひ、市場の人の形貌を説明させると、先帝のようであったという」と。『南史』沈炯伝に「行きて武帝の通天台を經、表を為りて之を奏」したことを載せ、その概略にいう、「甲帳珠簾一朝零落し、茂陵玉盤遂に人間に出づ」と。この故事に他ならない。上に（玉魚）の字があるので代えて（金盤）に作る。『搜神記』に「盧充が狩獵をしていて崔少府の墓に入り、その小女と結婚した。留まること三日、後三年、むすめは兎を抱いて盧充にかえし、さらに金盤を与えると、俄かに見えなくなった。盧充は市にゆき盤を売った。崔のむすめの母方のおばがこれを見ていった、昔わたしの妹は崔少府に嫁し、むすめがおりましたが、〔うがひ〕筭をさす十五の歳にならぬうちに亡くなりました。わたしはこれを痛んで、一つの金盤を贈り、棺中に納めさせました。今あなたの盤を見比べてみると、とても似ています」と。これは陵墓の故事として引くべきものではないが、ただその語を借用し、茂陵の玉盤に替えた。胡元端が云う、「〔金盤〕の字を〔玉盤〕の語に入れ、一句中に故事と言葉とを貫用して、両方とも痕跡がない。『史記』伯夷伝に經史の語を取り混ぜて、鎔解して文を成しているようなもので、まさしくこの杜翁が精巧に練り上げた妙処だ」と。この説がよろしきを得ている。兩句はあわせてみなければならぬ。けだし（玉魚）（金盤）は互文である。諸陵および貴人の墓は、どれも寇盜に発掘され、殉葬の御物は、ことごとく世間に出回ったのである。〔昨日〕といふ（蚤時）というのは、埋葬がおわったばかりですぐに発掘されるのを傷むのである。

見愁汗馬西戎ノ逼^ル 曾閃朱旗^ニ北斗^ノ殷^リ

※見：マノアタリ 逼：トリツメル 閃：テリアフ 殷：アカシ

見音現、對^{シテ}曾^ハ字^ニ而言。見愁、言^ハ愁^ハ在^ニ眼前^ニ也。汗馬、謂^ハ汗

血^ノ馬^ヲ。西戎^ハ天馬^ハ汗^ス則^チ血。吐蕃^ハ西南夷、本漢^ノ西羌、在^ニ長

安^ノ西八千里^ニ。故^ニ曰^ハ西戎^ト。曾^ハ言^ハ往事^ヲ、指^{シテ}廣德元年之亂^ヲ。

閃音^ハ撥、謂^ハ映射^{シテ}而閃^ス也。北斗^ハ旗^ノ畫^{ナリ}。左傳^ニ三辰旗旗、

疏^ニ云^ハ畫^ニ北斗七星^ヲ。殷^ハ於^ニ顔反^ニ、血色凝^レ紫^ニ曰^ハ殷。東漢觀記^ニ

段^ノ穎徵^ハ還^ニ京師^ニ、朱旗騎馬殷^{シテ}天^ニ蔽^レ日^ヲ。旗^ニ言^ハ殷^ヲ、本^レレ

此^ニ。殷^ハ一^ニ作^レ閑^ニ、非^ズ。公父諱^ハ閑、不^レ應^ニ犯^ス用^ヲ。且^ハ北斗閑成^ニ

何^ノ文理^ヲ。見愁與^ニ愁顔^ニ犯^ス、疑^ハハ^ハ憂^ハ字^ノ之^ヲ訛^ル。

〔注17〕 輯註に〈見〉字の下に「音現」と注する。宇都宮遯庵の増広本にも挙

げる。ちなみに、遯庵の詳説には張遠『会粹』（卷十五）を引く。

〔注18〕 『旧唐書』卷一九六上、吐蕃伝上に「吐蕃は長安の西八千里に在り、本

と漢の西羌の地なり」と。なお、吐蕃については、訳注稿九、063「樓に

登る」詩の（注2）も参照。

〔注19〕 何か基つところあるのか、不明。なお、『分類』（卷一、将相）およ

び『集註』（卷二十二、将相類）に「閃は、閃鏐なり」と。前者は宇都宮

遯庵の増広本に、後者は詳説に挙げる。

〔注20〕 ちなみに、森槐南『杜詩講義』は「吐蕃の朱旗を翻へした時の有様が、

殺気天に沖つて北斗の辺まで赤くなつたと思ふ様に恐ろしい有様であ

つた」と解し、鈴木虎雄『杜少陵詩集』（卷十六）は「北斗は天上の北斗

星をいふ」とし、「旗上に画きたる模様なりと説くものあれども今取ら

ず」と説く。

〔注21〕 『左伝』桓公二年に「三辰旗旗は、其の明を昭かにす」とあり、杜預

の注に「三辰は日月星なり。旗旗に画くに、天の明を象る」。孔穎達の

疏に「穆天子伝に称すらく天子盛姫を葬り日月七星を建つと。蓋し北斗

七星を画くなり」と。

〔注22〕 輯註に挙げる南宋・周必大の『老堂詩話』に「殷、於顔の切。朱色

なり」と。

〔注23〕 『東漢觀記』に「段穎徴されて京師に還る、鼓吹曲尽き、朱旗騎馬、天

に殷として日を蔽ふ」と。輯註および『唐詩貫珠』に挙げ、輯註は宇都

宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注24〕 『集千家註』（卷十二）、邵傳『集解』、薛益『分類』は〈閑〉に作る。

宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。ちなみに、輯註に「荆は間に作る。諸

本多く同じ。正異、定めて殷に作る」と。荆は、北宋の王安石（介甫）

『四家詩選』。『正異』は、宋の蔡興宗（伯世）のそれ（現在、散佚）。

〔注25〕 なお、『集千家註』に挙げる蔡夢弼の注に「或いは云ふ、閑字殷に作

る。謂ふならく子美の父の名は閑、應に閑字を用ふるべからず。然れど

も集を按ずるに又た翻々戲蝶閑過幘の句有り。豈に文に臨んで諱まざ

るに非ずや」と。ここに引くのは、128「小寒食舟中作」詩の第五句（但

し、翻々は娟娟に作る）。詳解は張耒『明道雜志』に拠つて、〈閑〉字は

本来〈閑〉に作るとする。

〔注26〕 『夜航詩話』卷四に「詩は同字を犯すを忌む。然れども義同じからず

んば重複と為さず。之を傍犯と謂ふ」と。ちなみに、顧宸『註解』に「見

愁」（愁を破る莫かれ）の両「愁」字、呼吸相照らして必ずしも重出を以

て嫌と為さず」と。

〈見〉、字音は現、〈曾〉字に対して言う。〈見に愁ふ〉は、愁いが眼

前にあるのを言うのである。〈汗馬〉は、汗血馬のこと。〈西戎〉の

天馬は汗を流すと血である。吐蕃は西南夷で、もと漢代の西羌、長

安の西八千里にいた。それゆえ〈西戎〉という。〈曾て〉は往事を言

い、広徳元年（七六三）の乱を指す。〈閃〉、字音は撥、相映射して

閃鏐することである。〈北斗〉は、旗に画かれたもの。『左伝』に「三

辰の旗旗」とあり、疏に「北斗七星を画く」と。〈殷〉は、於顔の反、

血色が紫を凝らすのを殷という。『東漢觀記』に「段穎は徴されて京

師にもどつたが、朱旗や騎馬は天に殷として日を蔽つた」と。旗に

殷と言うのは、これに本づく。〈殷〉、一に〈閑〉に作るのはよくない。

公の父の諱は閑で、犯し用いるはずない。それに「北斗閑」で

は文のすじめを成さない。〈見愁〉は〈愁顔〉と文字の重複を犯して

いる。憂字の訛りではなからうか。

多少ノ材官守_ル涇渭_ヲ 將軍且莫_レ破_ニ愁顔_ヲ

※材官_ハモノ、フ 守_ニカタメル

多少_ハ多也。漢書_二材官蹶張_一、註_二材官_ハ武技之臣_一。涇渭_ハ二水_一名_也。

在_ニ長安_一西北_ニ。將軍指_ニ郭子儀_一。破_ニ愁顔_一謂_ニ歎笑_一也。通鑑_二代宗紀_一永泰元年春、吐蕃遣_ニ使_一請_ニ和_一。帝問_ニ郭子儀_一、對_ニ曰_一、

吐蕃利_ニ我不虞_一、若_シ不虞_ニ而來_一、國不_レ可_レ守_ル矣。乃遣_ニ河中兵_一戍_ニ奉天_一、又遣_ニ兵_一巡_ニ涇原_一以_レ覘_ニ之_一。材官守_ニ涇渭_一、

正_ニ謂_ニ此_一也。蓋吐蕃雖_レ請_ニ和_一、然_ト涇渭之間、防守猶嚴、將軍所_レ慮誠_ニ深_一。彼其胡虜反復無_レ常、前日之愁尚在_ニ目中_一、豈一旦

姑_ク安_ニ可_レ輒_レ破_ニ愁顔_一。諸人_ハ乃皆忘_ニ愁_一、不_レ復爲_ニ慮_一。獨將軍不_レ敢_ニ忘_一憂_ヲ、以_ニ國難_一爲_ニ己任_一、殆所謂_ニ匈奴未滅、安_ニ以_一家爲_ニ者_一。庶幾_ハ勿_レ弛_ニ其節_一、天下所_レ倚賴_ニ也_一。此寓_ニ規_一于頌_ニ、竊_ニ祈祝_一也。公之憂_ニ國厚矣哉_一。是歲九月吐蕃果_ニ復反_一。與_ニ同紇_一合_ニ兵_一入寇。然_ト因_ニ其有_一備、不_レ戰而退。

子儀之功也。

(注27) 釈大典『學語編』(卷上、官職類)に「材官」の語を挙げ「モノ、フ」と左訓を施す。

(注28) 薛益『分類』に「多少は多を言ふなり」と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

(注29) 『漢書』卷四二、申屠嘉伝に「材官蹶張を以て、高帝に従ひ項籍を撃ち、遷りて隊率と爲る」と。ちなみに、如淳の注に「材官の多力、能く驍弩を脚踏し之を張る、故に蹶張と曰ふ」とあり、顔師古の注も、弩の一種で「足を以て踏む者を蹶張と曰ふ」と。

(注30) 薛益『分類』および顧宸『註解』に「材官は武技の臣」と。いずれも宇都宮遼庵の増広本に挙げる。

(注31) 邵宝『集註』に「涇渭は二水の名。長安の西北に在り」と。

(注32) 『資治通鑑』卷二二三、代宗の永泰元年(七六三)三月の条に「庚戌(十九日)、吐蕃、使を遣はして和を請ふ。元載、杜鴻漸に詔して与に興唐寺に盟せしむ。上、郭子儀に問ふ、吐蕃盟を請ふ、何如と。対_ニ曰_一く、吐蕃、我が不虞を利とし、若し不虞にして来らば、国守るべからず

矣と。乃ち相繼いで河中の兵を遣はして奉天を戍せしめ、又た兵を遣はして涇原を巡つて以て之を覘はしむ」と。胡三省の注に「不虞は、猶ほ不備のごときなり」と。なお、顧宸『註解』は「通鑑紀事本末」に見える同様の記事を挙げる。河中の兵は、河中節度使配下の兵。その治所たる河中府は、今の山西省永濟県の西、蒲州鎮。奉天は、今の陝西省乾県。

涇原は、涇州(今の陝西省涇川県の北、涇河の北岸)と原州(今の寧夏省固原県)。涇州を治所とする涇原節度使が置かれたのは、大暦三年(七六八)のことである。

(注33) 顧宸『註解』に「此の二句、応に上の二句を転ずべし。猶ほ前日の愁ひ尚ほ目見の中に在り、今奈何ぞ愁顔を破らんやと云ふがごとし」と。

宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

(注34) 『史記』卷一一一、衛將軍驃騎列伝に霍去病の言葉として「匈奴未だ滅びず、家を以て爲す無きなり」と。

《多少》は、多である。『漢書』に「材官蹶張」とあり、注に「材官は武技の臣」と。《涇渭》は、二つの水の名。長安の西北にある。《將軍》は、郭子儀を指す。《愁顔を破る》は、歎笑することである。『通鑑』代宗紀に「永泰元年(七六三)の春、吐蕃が使者を遣わし和議を請うた。帝が郭子儀に問うと、答えていった、吐蕃は我が方の充分に備えないのを利とし、もし備えないうちにやって来れば、都は守ることができなくなりますと。そこで河中の兵を派遣して奉天を衛戍せしめ、さらに兵を遣つて涇・原を巡回して様子を伺わせた」と。《材官涇渭を守る》は、まさしくこのことである。ただし吐蕃は和議を請うたが、しかし《涇渭》の間では、防禦守備は依然として厳しく、將軍の配慮は誠に深かった。やつら《胡虜》の裏切りはいつものことで、前日の愁いはまだ目中にあり、どうして一旦しばらく安んじてたやすく《愁顔を破る》ことができようか。諸人はかえってみな愁いを忘れ、もはや顧慮しないのに、ひとり將軍だけは敢えて憂いを忘れず、國難を己が任となし、ほとんどいわゆる「匈奴未だ滅せず、安んぞ家を以て爲さん」というものだ。どうかその統制を

緩めてはならない、天下の頼みとするところなのだ。これは規しめを頌歌に寓し、ひそかに祈祝するのである。公の国を憂うることの何とも厚いことか。この歳の九月、吐蕃は案の定また反し、回紇と兵を合せて入寇した。しかし備えがあったので、戦わずして退却した。郭子儀の功績である。

075 其二

此首言回紇之難。回紇ハ即今之回回、是也。初臣屬突厥。國在突厥之北、去長安七千里、衆十萬。貞觀間突厥衰、回紇破之入貢。肅宗至德元載、討安史之亂、借兵回紇。回紇遣子葉護、將精兵四千人至。郭子儀克復兩京、皆用回紇之力。其後恃功驕橫、侵擾中國。遂合吐蕃入寇。故公恨借回紇之失、而嘆諸將之不勤王也。

(注1) 清・顧炎武『日知錄』卷二十九、吐蕃回紇の条に「唐の回紇は即ち今の回回、是れなり。(中略)其の回回と曰ふ者は、亦た回紇の転声なり」と。

(注2) 『新唐書』卷二一七上、回鶻伝上に「回紇、姓は葉羅葛氏、薛延陀の北、娑陵水の上に居り、京師を距つること七千里。衆十萬、勝兵之に半ばす」と。なお、『新』回鶻伝は『旧唐書』回紇伝とともに、平凡社東洋文庫『騎馬民族史2正史北狄伝』に訳注を取る(佐口透執筆)。

(注3) 『新』回鶻伝上に「肅宗即位し、使者来たりて緑山を討つを助けんことを請ふ。(中略)太子葉護身づから四千騎に將たりて来たるに及んで」云々と。

(注4) 薛益『分類』に(注16)に挙げた箇所に続けて「其の後回紇、功を待んで中国を侵擾す」と。宇都宮遼庵の増広本にも引く。

(注5) 『唐詩貫珠』(卷二十二、国事一)に「此れ諸將の王に勤め以て用を遇絃に致す能はざるを責む」と。

この一首は〈回紇〉の難を言う。回紇は、とりもなおさず今の回回がそれである。初め突厥に臣属しており、国は突厥の北にあり、長安から七千里をへだて、人口は十萬。貞觀(六二七〜六五〇)年間、

突厥が衰えると、回紇はこれを破り入貢した。肅宗の至德元載(七五六)、安史の乱を討つのに、兵を回紇に借りた。回紇は子の葉護を遣わし、將軍として精兵四千人を率いてやってきた。郭子儀が勝利して長安・洛陽の兩京を回復するのに、いずれも回紇の力を用いた。その後、功績を鼻にかけ驕横となり、中国を侵掠擾乱し、そのまま吐蕃に連合して入寇した。それゆえ公は助けを回紇に借りた過ちを恨んで(諸將)が王事に勤めないのを嘆くのである。

韓公本意築三城。擬絶天驕、拔漢旌。

三受降城並_レ在_二塞上_一。韓國公張仁愿所築、控_二制_一突厥之要地也。仁愿ハ中宗時人。景龍二年、封_二韓國公_一。神龍三年、於_二河北_一築_二三受降城_一。本漢朔方郡地。久爲_二虜所_一占。與_二中國_一以_レ河爲_レ界。河_ノ北岸_ニ有_二拂雲祠_一、突厥每_二入_一寇、必禱_二祠下_一、候_二冰合_一而入。河南郡縣、屢_レ被_二擾亂_一。是歲突厥西擊_二婆娑_一、仁愿乘_レ虛取_二漠南_一地、亟_レ築_二三城_一以_レ絶_二虜南寇路_一。三城首尾相應。以_二拂雲_一爲_二中城_一、東西城相距_二各四百里_一。皆據_二津要_一、遙_レ相_二接應_一。自是突厥不敢_二度_一山獵牧、河南無_レ復寇掠。減_二鎮兵數萬_一。其折_二北虜之衝_一、唐一代之勝事也。天驕ハ謂_二突厥_一。漢書匈奴傳、單于遣使遺_二漢書_一曰、胡者天之驕子也。拔_二漢旌_一翻_二用_一淮陰侯傳、拔_二趙旌_一立_二漢赤幟_一、言_二據險_一扼_二胡_一以_レ保_二河南_一也。蓋欲_二言_一求_二助_一回紇之非_レ策、先舉_二韓公偉勲_一稱_二之_一。韓公嘗築_二三受降城_一者、本欲_二禦_一虜_ノ絶_レ之_一、乃反_二頼_一虜兵_ニ自援_一、遂_二爲_一虜_ノ侵擾_一。其負_二韓公之意_一、不_二亦甚_一乎。案_二開元中突厥款塞_一、歲許_二西受降城_一爲_二互市_一、以_二金帛_一市_二馬_一、此已_二負_一韓公_ノ本意、所以_二致_一借_二兵_一胡虜也。故特_二以_一此_二起_一之_一。

(注6) 『旧唐書』卷九十三、張仁愿伝に「張仁愿は、華州下邽の人。(中略)景龍二年、左衛大將軍、同中書門下三品に拜せられ、韓國公に封ぜらる」と。張仁愿の伝は『新唐書』卷一一一にも見える。

〔注7〕 輯註に『旧』張仁愿伝を引いて「神龍三年、仁愿、河北に於いて三受降城を築く。是れより先、朔方、突厥と河を以て界と爲す。河の北岸に拂雲祠有り、突厥入寇する毎に、必ず祠に禱つて氷合を候つて入る」と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

〔注8〕 『旧』張仁愿伝に「河北に於いて三受降城を築き、首尾相応じ、以て其の南寇の路を絶つ」と。

〔注9〕 『旧』張仁愿伝に「私雲祠を以て中城と爲し、東西兩城と相去ること各おの四百餘里、皆津済に拠り、遙かに相応接す。（中略）是れ自ら突厥山を度り放牧することを得ず、朔方復た寇掠無く、鎮兵數万人を減ず」と。

〔注10〕 『漢書』卷九十四上、匈奴伝上。

〔注11〕 『史記』卷九十二、淮陰侯列伝に「趙の轍を抜き漢の赤轍二千を立つ」と。

〔注12〕 積大典『杜律發揮』に「既為胡虜侵掠、又復借胡虜兵自援、益負韓公本意也」と。

〔注13〕 款塞は、通好を求めて塞門を叩く。『資治通鑑』卷二二三、唐紀二十九、玄宗の開元十五年（七二七）九月の条に「丙戌（十七日）、突厥毗伽可汗其の大臣梅録啜を遣はして入貢せしむ。吐蕃の瓜州を寇するや、毗伽に書を遣り、之と俱に入寇せんと欲す。毗伽并せて其の書を獻ず。上之を嘉し、西受降城に於いて互市を爲すことを聽し、毎歲緋帛數十萬匹を齎らして就きて戎馬に市し、以て軍旅を助け、且つ監牧の種と爲し、是れに由つて國馬益ます壯なり焉」と。互市は、交易場。

三受降城はともに塞上にある。韓國公張仁愿が築いたもので、突厥を控制する要衝の地。仁愿は中宗の時の人。景龍二年（七〇八）、韓國公に封ぜられ、神龍三年（七〇七）、河北に受降城を築いた。もと漢の朔方郡の地であったが、久しく胡虜に占領されていた。中国とは黄河で境界とする。黄河の北岸に私雲祠があり、突厥は入寇すること、必ず祠下に祈禱し、氷が合ふのを待って入寇した。河南の郡県は、しばしば擾亂を被った。この歳、突厥は西のかた婆葛を撃つと、仁愿は虚に乘じて漠南の地を取り、すみやかに「三城」を築いて胡虜の南下して侵略する路を「絶」った。「三城」は首尾相応じ、私雲を中城とし、東西の城と相距たることそれぞれ四百餘里。いず

れも要衝に拠り、遙かに相接応した。これより突厥はあえて山を越えて獵牧せず、河南はもはや入寇侵掠されなくなり、鎮兵數万を減じた。その北虜の勢いを挫くこと、唐一代のすばらしい出来事である。「天驕」は、突厥のこと。「漢書」匈奴伝に「單于が使いを遣わし漢に書を遣つていう、胡は天の驕子である」と。「漢書」は、淮陰侯伝の「趙旌を抜き漢の赤轍を立つ」を翻用し、陰に拠つて胡を扼して河南を保つたことを言うのである。けだし援助を「回紇」に求めることがまತ್ತとうな策に非ざることを言おうとして、先ず「韓公」の偉勲を挙げてこれを称した。韓公がかつて三受降城を築いたのは、本来胡虜を防禦してこれを「絶」とうとしたためであるのに、かえつて逆に胡虜の兵に頼つて自らを援け、そのまま胡虜のために侵掠擾亂された。その韓公の意に負くこと、なんともひどいものではないか。案ずるに開元年間に突厥が通交を求めて塞を款き、毎年、西受降城を互市とすることを許し、金帛を以て馬を購入した。これはすでに韓公の本意に負いており、兵を胡虜に借りるような不始末を招いたゆえんである。それゆえ特にこのことから言い起こしている。

豈謂盡煩回紇救馬 翻然遠救朔方兵

※豈謂：ゾングハイ 煩：セワカケテ 翻然：アチラコチラニ 救：カセイ

紇音下沒反。以下其當禦而絶者、反請兵自援、故曰翻

然。驚怪之辭也。朔方兵謂郭子儀之軍。安史之亂、子儀以孤軍起朔方。肅宗請兵回紇援之。豈謂負韓公禦戎

本意而反頼以平寇亂邪。所以貽今日之大患也。

〔注14〕 あべこべにの意。ちなみに、積大典『文語解』卷二、翻の条に「反ノ字ノ平声ナリ。アチラコチラウチカヘス意ナリ」と説く。

〔注15〕 『草堂詩箋』（卷二十七）に「下没の切」と。「字彙」も同じ。

〔注16〕 薛益「分類」に「朔方の兵は、至徳元載、郭子儀、朔方・安西・回紇

等の兵を以て安慶緒を討つ」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

《絶》、字音は下没の反。その当然防禦して《絶》つべき相手に対しておかえつて兵を請い自らを援く、それゆえ《翻然》という。驚き怪しむ辞である。《朔方の兵》は、郭子儀の軍のこと。安史の乱に、郭子儀は孤軍を率いて朔方に起ち、肅宗は兵を《回紇》に請うてこれを援けた。《豈に謂はんや》韓公の戎を禦ぐ本意に負いて、あべこべに頼つて寇乱を平げようとは。今日の大患を貽すゆえんである。

胡來不覺潼關ノ隘ノ 龍起ヲ猶聞晉水清シヲ

※不覺：コト、モセズ 猶聞：ムカシナツカシ

胡來ハ謂下回紇爲ハ僕固懷恩一ノ所誘、與吐蕃連兵入寇上ノ事。潼關ハ在華州華陰縣ニ。隘隘最險、長安所恃以爲固。而胡騎長驅、不覺其險隘、如入無人之境。此嘆虜兵之盛、而諸將坐視其失守、偷安不救、所以有結局之責也。龍起ハ謂高祖ノ創業。晉水ハ在晉陽縣。即興王之地。冊府元龜高祖師次龍門、代水清。代水ハ即晉水也。蓋當時創業之盛、不唯人助順効力、天地亦復應之也。上ノ句傷今、此句追昔思創業之盛、而嘆今之憤憤也。舊解以胡來爲祿山、龍起爲靈武、即位、絶不相渉。

〔注17〕 輯註に引く清・潘耒章『杜詩博議』に「胡來」は旧に祿山を指し、或いは以爲へらく吐蕃を指すと。皆是に非ず。愚謂へらく此れは回紇の懷恩が爲に誘はれて兵を連ねて入寇するを指す云々と。輯註は、宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。なお、僕固懷恩の伝は、『旧唐書』卷二二一、『新唐書』卷二二四上に見える。

〔注18〕 薛益『分類』に「潼関は華州の華陰県に在り」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔注19〕 顧宸『註解』に「潼関は天険なり。長安恃んで以て固めとする所。吐蕃長驅に及んで、全く恃むに足らず。上、聖憂を瘥ましむ。然らば則ち潼関の險隘、此に至つて其の隘を覺えず矣」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げるが、誤つて《瘥》を《塵》に作り、「上、塵聖憂」とする。

〔注20〕 顧宸『註解』に〔注19〕に挙げた箇所に続けて「蓋し当日吐蕃の盛んになると禦備策無きとを極めて言ふ。恐らくは其の蹂躪を恣にして、無人の境に入るが如きなり」と。

〔注21〕 輯註に錢注（卷十五）を引いて「冊府元龜に高祖の師、龍門に次る、代水清む」というのを引く。『冊府元龜』卷二十一、帝王部、徵應、唐高祖の条に「（大業十三年八月）癸巳、龍門県に次る。河水變じ、白狐見はる」と。輯註は宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔注22〕 顧宸『註解』に「旧解に《胡來》を以て祿山と爲し、《龍起》を靈武の即位と爲す、絶えて相渉らず」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。旧解は『集千家註』、薛益『分類』、邵宝『集註』、邵傳『集解』などを指す。

《胡來たる》は、《回紇》が僕固懷恩に誘われて、吐蕃と兵を連ねて入寇したこと。《潼関》は、華州華陰県にある。狹隘で最も險しく、長安の頼みとして固めるところであるのに、胡騎は長驅して、その險隘を《覺えず》、無人の境に入るようであつた。これは虜兵が盛んであるのに《諸將》がその守を失するのを座視し、安逸を偷んで救わないのを嘆じており、結局の間責があるゆえんである。《龍起》は、高祖（李淵）の創業のこと。《晉水》は、晋陽県にある。とりもなおさず興王の地。『冊府元龜』に「高祖の軍が龍門に次すと、代水が澄んだ」と。代水は、ほかならぬ《晉水》である。けだし當時創業の盛んなことは、ただ人が天道に従う者を助け力を効したのみならず、天地もこれに感応したのである。上の句は今を傷み、この句は追つて昔の創業の盛んなるを思い、今の乱れたありさまを嘆ずるのである。旧解には《胡來》を祿山のこととし、《龍起》を（肅宗の）靈武での即位のこととするが、決して関係しない。

獨至至尊ヲ憂ハ社稷ヲ 諸君何ヲ以答昇平ニ

※憂：ナンギガラセ 答：ムクフ

天子獨憂社稷之難、而諸將不効禦備之力、徒享昇平之恩、何ヲ以報答之邪。往年吐蕃犯闕、代宗奔陝、發詔徵諸道兵、莫有不至者。故云古者主憂臣勞、今乃臣

逸^{シテ}君^ノ勞^ヲ。所以^ニ勉^ム諸將^ヲ者切^{ナリ}矣。直^ニ使^{シテ}泄泄^ノ之^ノ臣^ヲ置^キ身^ヲ無^レ地^ヲ、尙何^ノ其^ノ有^リ視^ミ面目^ヲ邪^ニ。天子^ハ尊^ニ之^ヲ、故^ニ曰^ク「至尊^ニ」。社稷^ハ猶^モ云^フ「國家^ヲ」。凡^ソ大事^ハ以^テ社稷^ヲ稱^ス。答^ニ酬報^ヲ也。昇平^ハ謂^フ「未^レ亂^シ以前^ニ、昇^ハ猶^モ盛^ニ也」。

(注23) 広徳元年(七六三)九月。『資治通鑑』卷二三に「吐蕃入寇し、(程)元振時を以て奏せず、上、狼狽して出幸するを致す。上、詔を発して諸道の兵を徴すに、李光弼等皆元振の中に居るを忌み、至る者有ること莫し」と。

(注24) 邵傳『集解』に「諸將其の未だ乱せざるに当たつて昇平の恩を享通す、知らず何を以て之に答ひん。君憂ふれば臣辱められる、此れ理の常。臣逸して君勞す。冠履倒置す。之を責むること深し矣」と。(君憂臣勞)は、『史記』卷四十一、越王句踐世家に「主憂ふれば臣勞し、主辱められれば臣死す」と見える。

(注25) 泄泄は、ぐずぐず言うばかりで実行しないさま。『詩経』大雅・板に「天の方に蹶く、然く泄泄する無かれ」と。集伝に「泄泄は、猶ほ沓沓のごときなり。蓋し弛緩の意。孟子に曰く、君に事ふるに義無く、進退礼無く、言へば則ち先王の道を非る者は、猶ほ沓沓のごときなり」と。

『孟子』は、離婁上に見える。

(注26) 『詩経』小雅・何人斯に「視たる面目有り、人を視る極まり罔し」と。

(注27) ちなみに、『孝経』諸侯章に「富貴其の身を離れず、然して後能く社稷を保つ」とあり、文政九年(二八二六)刊の津阪東陽『孝経發揮』に「社稷は猶ほ國家と云ふがごとし。社は土神、稷は穀神。国、土穀に資りて以て人を養ふ。故に立てて以て之を祀る。古は列国皆社稷有り。其の君、主として之を祭る。故に諸侯を称して社稷の主と爲す。凡そ諸侯封を受くれば必ず建つ。国滅ぶれば俱に亡ぶ。故に國家存亡の大事に係る者は必ず社稷を以て之を称す」と。

天子(独り)が(社稷)の難を(憂)えて、(諸將)は防備の力を効さず、いたずらに(昇平)の恩恵を享受するだけで、どうやってこれに報答しようか。往年、吐蕃が宮闕を犯し、代宗は陝州に出奔した。詔を発して諸道の兵を徴したが、やってくる者はいなかった。それゆえ云う、古は主君が憂えれば臣下は苦勞したのに、今ではな

んと臣下が樂をして君主が苦勞すると。(諸將)を勉勵するゆえんものは切実である。直ちにぐずぐずと王命に従わない臣下をして身の置き所がないようにさせれば、それでもなおどうして人としての面目があるのか、面目なく思うはずだ。天子はこの上なく尊いものであるの、それゆえ(至尊)という。(社稷)は、國家というのとほぼ同じ。すべて存亡にかかる大事には(社稷)をもつて称する。(答)は、酬報である。(昇平)は、いまだ乱れぬ以前のこと。(昇)は、盛とほぼ同じである。

076 其三

此首傷^下自^ニ祿山之反^{セシ}、禍亂相尋^テ、至^レ今^ニ未^レ靖^マ、而^ニ府兵法壞^ク、轉輸不^レ繼^ク、上下交^ク窮^{スル}也。末^ニ贊^下王綰^上汰^シ冗兵^ヲ勸^レ農^ヲ、以^テ固^{スル}國本^ヲ、所^ニ以^テ媿^{スル}諸藩^ヲ也。

(注1) 府兵については、(注15) 参照。

(注2) 王綰(字は夏卿。七〇一―七八二)については、訳注稿(六)、033「裴廼蜀州の東亭に登つて客を送り早梅に逢つて相憶うて寄せらるるを和す」詩の(注2) 参照。

(注3) 『杜詩偶評』に「起は安(祿山)・史(思明)、京を陥すを追憶す。下は河北の餘孽を指す。因つて転輸繼がざるを傷み、而して王綰諸藩を愧勵するを以てす。其の言微なり矣」と。

この一首は、安祿山の反せしより、禍亂相次いで、今に至つてもいまだ靖まらず、府兵の制度が崩壊し、物資の輸送が続かず、上下とも窮乏するのを傷むのである。末尾に王綰が無駄な兵を淘汰し帰農を勧めて国の根本を固めたのを讃えるのは、諸藩鎮を恥じ入らせ励ますためのものである。

洛陽宮殿化^{シテ}爲^ル烽^ト 休^{コト}道^ヲ秦^ノ關^百重^ニ

烽^ハ兵火^也。言^フ安史之亂、洛陽遭^ニ焚劫^ニ也。漢書高帝紀^ニ秦得^ニ三百

二^ニ。註秦^ノ地險固、以^テ三^ニ萬人^ヲ守^レハ、足^レ當^ニ三百萬人^ニ。重^ニ謂^フ重關^也。言^フ關守非^ニ一重^ニ也。此言東都宮殿之盛^{ナル}、忽遭^ニ兵火^ニ爲^ル

燼^ニ、則要害之險固、不^ニ復足^ニ以恃^ニ矣。蓋嘆^ニ在^レ德^ニ不^レ在^レ險^ニ也。

〔注4〕邵宝『集註』および薛益『分類』に見える。後者は宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔注5〕薛益『分類』、輯註（卷十三）に挙げ、前者は宇都宮遷庵の増広本にも引く。『漢書』卷一下、高帝紀下、六年十二月の条、田肯の語に「秦は形勝の国なり。河を帯び山を阻て、懸隔千里、持戟百万、秦百二を得」と。蘇林の注に「百二は百中の二を得、二万人なり。秦地險固、二万人もて諸侯の百万人に当たるに足る」と。

《烽》は、兵火である。安史の乱で、《洛陽》が焼き打ちや掠奪に遭ったのを言うのである。『漢書』高帝紀に「秦百二を得」と。注に「秦地は險固で二万人で守れば、百万人に充分相当する」と。《重》は、幾重もの関のこと。関の守りが一重ではないことを言うのである。ここで言う意味は、東都《宮殿》の盛大なるが、忽ち兵火に遭つて灰燼となったのであれば、要害の險固はもはや恃むに足りないことになるのである。けだし国を守るのは為政者の徳にあつて險にないことを嘆ずるのである。

滄海末^ニ全^レ歸^ニ禹貢^ニ 薊門何^ニ處^ニ覓^ニ堯封^ニ

※滄海：トウゴクスデ 薊門：ホクコク

滄海^ハ泛^ク謂^フ東南^ノ地方^ヲ。薊門^ハ幽州^ノ范陽郡。即安史^ノ窟穴。餘黨李懷仙等猶盤^ス據^ス其地^ニ。封^ニ封疆^也。史記^ニ周封^ニ堯後^ヲ于^ニ薊^ニ。故^ニ曰^ニ堯封^ニ。此撫^ニ輿圖^ヲ而恨^ニ其不^ニ一統^ヲ。禹跡^ノ貢賦尙未^ニ全^ク歸^ニ。堯後^ノ封疆無^レ所^ニ可^レ覓^ニ。蓋安史^ノ餘孽多有^ニ割據^ヲ州郡^ニ不^レ供^ニ貢賦^ニ者^上、不^ニ獨河北幽薊等^ノ州^ノ也。

〔注6〕《覓》字、錢注（卷十五）および輯註は《盡》に作り、輯註に「黄は覓に作る」と注し、「今、流俗本皆《覓》に従ふは非なり」という。黄は、宋・黄鶴のこと。輯註は宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔注7〕輯註に「《滄海》《薊門》は即ち河北の幽・瀛等の州。時に節度使李懷仙等、安史の餘党を取め、相与に其の地に蟠拠す」と。李懷仙について

は、「旧唐書」卷二二、「新唐書」卷二四上に伝がある。

〔注8〕邵宝『集註』に「堯封は唐の高祖の廟を神堯と号す」と注した後、「封は封疆なり」と。宇都宮遷庵の両著にも挙げる。

〔注9〕『史記』卷四、周本紀に「武王は先聖王を追思して、乃ち褒して神農の後を焦に、黄帝の後を祝に、帝堯の後を薊に、帝舜の後を陳に、大禹の後を杞に封ず」と。

〔注10〕顧震『註解』に「禹の貢賦未だ全く帰すること能はず、堯の封疆処として覓む可き無し。亦た古を借りて今を傷み、輿図を撫して深く惜しむの意」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

《滄海》は、漠然と東南地方のこと。《薊門》は、幽州の范陽郡。とりもなおさず安史の巢窟。殘党の李懷仙らがなおその地に盤拠している。《封》は、封疆である。『史記』に「周は堯の子孫を薊に封じた」と。それゆえ《堯封》という。これは輿図を撫してその一つ統合されていないのを恨む。《禹》が足跡を残した地域、中国全土からの貢賦はなおいまだ完全には（朝廷に）帰せず、《堯》の子孫が《封》ぜられた疆土は《覓》むべきところがない。けだし安史の殘党で州郡に割拠し貢賦を供しない者が多くおり、ただ河北の幽・薊といった州のみではないのである。

朝廷衰職誰^ニ争^ニ補^ニ 天下^ノ軍儲不^ニ自供^ニ

※軍儲：ケンゴウ

詩^ニ大雅^ニ衰職有^ニ闕^ニ、維仲山甫補^ニ之^ヲ。衰職^ハ謂^フ帝業^ヲ。補^ハ謂^フ匡^ニ諫^ニ。孝經^ニ天子有^ニ争臣^七人^一。争^ノ字本^ハレテ此^ニ爲^ニ虚^ニ活用^ス。是此老爐鍾^ノ妙處。誰^ニ争^ニ補^ニ者^上、若^シ朝廷^ニ乏^ニ補^ニ衰^ニ之人^ニ、帝業何以興隆^ニ邪。未^レ知果^シテ其^ノ人^一否。吾在^ニ遠方^ニ、不^レ得^ニ預^ニ聞^ニ也。軍儲^ハ士卒^ノ支用。唐^ノ制、府兵^ハ有^ニ事^ニ則徵^ニ爲^ニ兵^ト、無^ニ事^ニ則散^ニ爲^ニ農^ト、不^レ取^ニ給^ニ縣官^ニ而自食^ニ其地^ニ。是軍儲皆自供^ニ也。今兵在^ニ役^ニ而不得^ニ休^ニ、皆仰^ニ給^ニ餽餉^ニ而不^レ自供^ニ焉。夫^ハ禹貢^ニ未^レ歸^ニ而軍須^ハ然、内帑^ハ其^ノ能支^ニ乎。尤可^ニ深^ニ憂^ニ也。

〔注11〕《誰争補》の三字、錢注および輯註は《雖多預》に作り、輯註に「師尹

本は誰争補に作る」と注する。師尹は南宋初めの人で、字は民瞻。南宋・郭知達編『九家集註杜詩』(卷三十)に指摘するのに拠る。輯註は、宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

(注12) 『詩経』大雅・蒸民に「衰職おとせしむ闕おとせくること有らば、維ただれ仲山甫之を補ふ」と。集伝に「衰職は、王職なり」と。

なお、森槐南『杜詩講義』は杜甫の用いた衰職は「三公の職」で「天子の職」の意ではないとし、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(卷十六)も「後漢に至りては衰職を三公の職として用ふ」と。

(注13) 『孝経』諫諍章に「天子争臣七人有り」と。ちなみに、東陽『孝経發揮』は「争臣」に「ツヨイケンスルモノ」と左訓を施し、「争は去声。諍と同じ。猶ほ諫のごときなり。諫めて其の非を止む、争ふこと有るが若く然り。故に諍と曰ふ。蓋し諫の大なる者なり」と注する。

(注14) 明・胡応麟『詩藪』外編卷四、唐下に見える言い方。前出074「諸將」其の(注15)参照。

(注15) 明・焦竑『焦氏筆乘』卷四、「諸將」詩の条に「諸將の詩に(天下の軍儲自ら供せず)と。唐制、府兵は事有れば則ち徴して兵と為し、事無ければ則ち散じて農と為す。是れ軍儲皆自ら供するなり。今、兵休することを得ず、故に軍儲但だ給を別孔に取りて、自ら供せず」と。度会末茂『杜詩評義』にも引く。なお、軍儲については、『白氏六帖事類集』卷十六、軍資量に「軍食」の語を挙げ、「軍儲」と注する。別孔は、別途、別口。

(注16) 輯註に「府兵法壊れ、兵農遂に分かれ、天下の軍須は皆給を餽饌に仰ぎて自ら其の地に食さず。所謂(軍儲自供せず)なり」と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。軍須は、糧食資材を含むすべての軍需品。餽饌は、輸送された食糧。饌は餉と同じ。

『詩経』大雅に「衰職闕くること有らば、維れ仲山甫之を補ふ」と。「衰職」は、帝業のこと。「補」は、匡ただし諫めること。『孝経』に「天子に争臣七人有り」と。「争」字はこれに本づいて虚字として活用する。この杜翁が精巧に練り上げた妙処だ。「誰か争ひ補はん」とは、もし朝廷で天子を補佐する人材に乏しければ、帝業はどうして興隆しようか。果してそれに相応しい人がいるかどうか、いまだわから

ない。自分は遠方にあり、預り聞くことができないのである。「軍儲」は、兵士士卒の費用。唐代の制度では、府兵は有事の際には徴されて兵となり、そうでなければ散じて農となり、朝廷からは配給を受けずその地に自活した。これが「軍儲」を全部「自ら供す」ことである。今、兵は役にあつて休息することができず、いずれも支給を輸送された糧食に仰いで、「自ら供」しない。そもそも「禹貢」は「未だ」(帰)せぬうちに、軍需品とはいえばかりか都合に物入りで、国庫はいつたい支えきれようか。とりわけ深く憂うべきである。

稍喜臨邊王相國 冒銷金甲一事春農

※稍喜：マダシモウレシイハ 肯：ヨクモ

稍喜フタハ者、以下天下皆不ニ自供セ、而銷レ甲ヲ事レ農ヲ、僅ニ王一人ノ上ル也。一説ハ、稍喜ハ二字下シ得テ有二分ニ。蓋其計雖レ未ニ十分ナ、猶ハ爲二此善ト於彼、恐ク失ニ乎鑿ニ矣。時ニ王縉以宰相ヲ爲二盧龍節度使、故ニ曰ニ臨邊王相國ト。自可スル曰ニ冒ニ。見他將ハ不レ然ラ而王獨能ニ。金甲ハ鐵鎧也。銷ニ金甲ノ一事ハ春農ニ謂ニ汰ニ冗兵ヲ歸ニ農ニ也。銷ハ者言ニ其易ニ耕具ニ也。事ハ謂ニ自以爲事業ト而專務ニ之也。蓋王汰ニ冗兵ヲ、募ニ耕勸ニ農ニ、民布ニ于野ニ。故ニ曰ニ春農ト。春ノ字有ニ繁盛之意ト。是則寓ニ兵ヲ於農ニ、官家不レ費ニ供給ヲ、而守禦之備、在ニ其中ニ矣。能識ニ時務ヲ而固ニ其國本ヲ、所ニ以可レ喜ト也。舊解ニ以爲ニ屯田ト、不レ知ニ何ノ據ト。恐クハ臆度耳。舊唐書ニ、廣德二年、王縉拜ニ黃門侍郎同平章事ト。其年八月、代ニ李光弼ヲ都ニ統ニ河南淮南山東道諸節度行營ノ事ト。兼領ニ東京ヲ、畱ニ守ヲ。歲餘ニ、遷ニ河南副元帥ト、請ニ減ニ軍資錢四十萬貫ト、修ニ中ニ東都ノ殿宇ト。此可レ見ニ其汰ニ冗ノ省ノ費ノ之功ト也。或ハ謂ニ縉ノ諂附ニ元載ト、故ニ下ニ未ニ滿之辭ト、鑿ニ矣。公只喜ニ其知ニ籌國之要ト、未ニ必涉ニ縉ノ立身ノ始末ト耳。顧註ニ王縉以三好諛ヲ爲ニ相ト、固ニ不足ニ取ニ矣。然ニ猶有ニ此可レ嘉者ト、故ニ曰ニ稍喜ト。當時、將帥徒ニ擁ニ重兵ヲ而坐ニ、耗ニ軍儲ヲ、則深ク愧ニ中國諸侯ト。讀者

不_レ解_セ此義、不_レ知_ル老杜原_ニ本_ニ六經_ニ處_ス。吁、鑿_ニ之又鑿_{ナリ}矣。

(注17) 清・陳廷敬「杜律詩話」（卷下）に「（稍や喜ぶ）とは、天下皆自供せず、甲を銷し農を事とするは、僅かに王一人なるを以てなり」と。

(注18) 分寸は、尺度の意から、節度、分別。

(注19) 『旧唐書』卷二一八、王縉伝に、（注24）に挙げた箇所に続けて「大曆三年、幽州節度使李懷仙死す。縉を以て幽州盧龍節度を領せしむ」と。盧龍は幽州節度使配下の軍隊の名号。但し、この「諸將」詩は、大暦元年（七六六）作するのが通説で、それに従えば、王縉まだ盧龍節度使となっていない。

(注20) ちなみに、釈大典「詩語解」巻上、肯の条に「字彙「肯可也」と説き、この「肯_ヲ銷_ニ金甲_ヲ事_ニ春農_ヲ」を含む幾つかの句例を示して「並可_レ之也」（可之にガエンスルと左訓）という。

なお、鈴木虎雄『杜少陵詩集』は、〈肯〉を「こちらからもちかけて相談する意にとるべし」として、尾聯を「このときすこしばかり喜ぶべきことは王相国（縉）が辺境にのぞまれたといふことだ。相国は兵器をとかして農具をこしらへ春をまつて農作を専務とさるるかんがへがおありになるかどうか」と解する。

(注21) ちなみに、「春酒」の語についてではあるが、訳注稿(一)、002「鄭駙馬潛曜洞中に題す」詩の詳解に「春の字、富貴の意有り」、訳注稿(七)、046「野望」詩の詳解に「春の字、美好富盛の意有り」と注する。また「春風」について、『夜航詩話』巻三に「詩に春風を用ふるは、富盛の意有り」と指摘する。

(注22) この言い方、例えば、『宋史』卷一九〇、兵志四に「義勇を河北の伏兵と為し、時を以て講習し、儲饗を待つ無きは、古の兵を農に寓するの意を得」と。また清の王夫之『說通鑑論』卷二、文帝の条に「鼂錯が民を従して刃を突するの策は偉なり。兵を農に寓するの法は、後世、腹裏に行なふ可からざれども、塞徼に行なふ可し」と。

(注23) 邵傳『集解』に「兵を銷し農を事とし屯田の計を為すなり」と。
(注24) 輯註に挙げるのに拠る。『旧唐書』王縉伝には「広徳二年、黃門侍郎同平章事、太微宮使、弘文崇賢館大学士に拜せらる。其の年、河南副元帥李光弼、徐州に薨す。縉を以て侍中、持節都統河南、淮西・山南東道諸節度行營事と為す。縉懇ろに侍中を譲り、之に従ひ、上柱国を加へ、東

都留守を兼ねしむ。歳餘、河南副元帥に遷り、軍資錢四十万貫を減じて、東都の殿宇を修せんことを請ふ」と。黃門侍郎は、門下省の次官、正四品上。同平章事は、宰相職たる中書省の長官（中書令）と門下省の長官（侍中）以外の官職にあるものを宰相とする場合の肩書。

(注25) 顧宸「註解」に「（稍や喜ぶ）とは、深く不満の意を致す」、輯註に「（稍や喜ぶ）とは、亦た不満の辞」と。輯註は、宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注26) 顧宸「註解」に「考ふるに元載政を擅_ニにし専横す。王縉之に附す。此れ奸臣の尤なり。公云ふ（稍や喜ぶ）と。蓋し以て当時の諸帥併せて王縉にも亦た如かざるを愧しむる耳。縉、軍資を以て東都の宮殿を修む。又た隠として首句の（宮殿化して烽と為る）と相応ず。子美意を用ふること痕跡を露はさず。諸註俱に云ふ、法を王縉に取らざる可からずと。直に未だ王縉が立身の始末を考へざる耳」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注27) 以下は、顧宸「註解」の文言そのものではなく、その趣旨を述べたもの。なお「註解」に黃家舒の「春秋に呉楚の君を進むるは、深く中国の諸侯を愧しむる所以なり。此等の解を読まざれば、老杜原と六経に本づく処を知らず」というのを引く。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。黃家舒については、訳注稿(四)、014「曲江酒に對す」詩の（注36）参照。

〈稍や喜ぶ〉とは、〈天下〉皆〈自ら供〉せず、〈甲〉を〈銷〉し〈農〉を〈事〉とするのは、わずかに王縉一人だからである。一説に、〈稍喜〉の二字は下し得て節度があると。けだしその計はいまだ十分ではないけれども、それでもこちらの方があちらよりもましだとするのであろう。おそらくは穿鑿に失する。時に王縉は宰相を以て盧龍節度使となっていたので、それゆえ〈辺に臨む王相国〉という。自ら可とするを〈肯〉という。他の諸將はそのようではなく王縉ひとり能くするのを表わす。〈金甲〉は、鉄製の鎧である。〈金甲を銷し春農を事とす〉は、無駄な兵を淘汰し農民にもどすことである。〈銷〉とは、その耕具に易えることを言うのである。〈事とす〉は、自ら以て事業となして専らこれに務めることである。けだし王縉は無駄な

兵を淘汰し、耕作者を募り帰農を勧め、民は野に散らばったのであろう。それゆえ〈春農〉という。〈春〉字には繁盛の意がある。これぞ兵を農民に割り当て、官家は供給を費さず、守禦の備えはそのなかにあるというものだ。よく時務を認識して国家の根本を固めたのは、〈喜ぶ〉べきゆえんである。旧解に屯田のこととするのは、何に拠ったか分からない。おそらくは臆測にすぎない。『旧唐書』に「広徳二年（七六四）、王縉は黃門侍郎・同平章事を拜命した。その年八月、李光弼に代つて河南・淮西・山南東道諸節度行營事を都統し、兼ねて東京留守を領した。一年餘りで河南副元帥に遷り、軍資金の錢四十万貫を減じ、東都の殿宇を修せんことを請うた」と。これからその無駄を淘汰し費を省いた功を見ることができるのである。或いは王縉は元載に諂い追従していたので、それゆえ未だ満たざるの辞を下すとするのは、鑿ちすぎだ。公はただその国家の大事を計る要点を知っているのを喜ぶだけで、いまだ必ずしも王縉の立身の始末に涉らないのだ。顧註に「王縉は好諛を以て宰相となつたのは、もとより取るに足らない。されどなおこの嘉すべきものがあり、それゆえ〈稍や喜ぶ〉という。当時将帥はいたずらに強大な兵力を擁して、何もせずに〈軍儲〉を消耗するばかりだとすれば、中国の諸侯を深く愧じさせている。読む者はこの義を解さず、老杜が元来六経に本づいているところを知らない」と。ああ、穿鑿に穿鑿を重ねている。

077 其四

此首言朝廷用中官爲將、而失交趾珠崖之貢。其實ハ託レ惜此一事、而深戒レ不當使中官掌兵柄。故後聯推開而言レ之。其意微矣。蓋宦者監軍、朝廷因疑諸將、特以親信參之。尤爲當時弊政、而其勢難於斥言。是五首中最苦心之作也。

（注1）ちなみに、輯註に「此れ朝廷当中官をして將爲らしむべからざることを言ふ」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。中官は宦官。

この一首は、朝廷が中官を用いて將軍とし、交趾・珠崖の貢を失つたことを言う。その実はこの事態を惜しむのに託して、中官に兵權を掌握させるべきではないことを深く戒めている。それゆえ後聯に推し開いてこれを言うが、その意は隱微である。けだし宦者が軍を監するのは、朝廷が諸將に疑念をもつために、特に親近信任の者でこれに参与させた。とりわけ当時の弊政で、その權勢は明らかに指して言うのに難しい。これは五首の中で最も苦心の作である。

同レ首扶桑銅柱標 冥冥 氣稜末全銷

※冥冥：モヤクヤ

扶桑ハ國名、在碧海中。見二十洲記。此只泛謂海外之地耳。

銅柱標ハ漢馬援征交趾所植、表漢極界。見本傳。交趾ハ在中國極南界、土壤相接。漢置日南交趾九真三郡。至南

宋時、別自爲國號安南。冥冥暗貌。氣稜ハ妖氣也。明皇

用中官楊思勳、將兵討交趾、殘酷好殺、敗而還。代

宗初、呂大乙亦以中官爲廣南市舶使、逐刺史張休而反。

自是嶺南不供職貢、至其禍未平。故回首望三南

天、嘆其喪地覺國也。

（注2）薛益「分類」に「扶桑は國名、碧海の中に在り」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

（注3）前漢・東方朔の撰とされる『十洲記』（『海内十洲記』）に「扶桑は碧海の中に在り、地は方万里」と。後出082「白帝城の最高樓」詩の（注19）

参照。

（注4）薛益「分類」に「後漢の馬援伝に、光武、援を拜して伏波將軍と爲す。南のかた交趾を征す。銅柱を立て漢の極界と爲す」というが、銅柱のこととは、『後漢書』馬援伝そのものには見えず、唐の李賢注に引く『廣州記』に「援、交趾に到り、銅柱を立て、漢の極界と爲すなり」という。

交趾は今のベトナム北部、ハノイ地方。ちなみに、輯註は『南史』卷七

十八、夷貊伝、林邑国の「馬援植つる所の両銅柱、漢界を表す処なり」というのを挙げる。『分類』および輯註は、宇都宮遷庵の増広本に引く。

(注5) 『大明一統志』卷九十、安南の条に「漢武帝、南越を平らげて交趾・九真・日南の三郡を置く」と。

(注6) 薛益『分類』に「氣稜は妖氣なり」と。宇都宮遷庵の両著にも挙げる。

(注7) 楊思勛については、『旧唐書』卷一八四、『新唐書』卷二〇七に伝がある。

(注8) 『資治通鑑』卷二三三、代宗紀、広徳元年（七六三）十一月の条に「宦官交州市舶使呂太一、兵を發して乱を作す。節度使張休、城を棄てて端州に奔る。太一兵を縦にして焚掠し、官軍討ちて之を平らぐ」とあり、胡三省の注に「唐、市舶使を交州に置き以て商舶の利を収む。時に宦者を以て之を為す」と。

(注9) 職貢は貢物。例えば、『後漢書』孔融伝に「荊州の牧劉表は職貢を供せず」と。朝廷の命に従わないことをいう。

〈扶桑〉は、国名で、碧海中にある。『十洲記』に見える。ここではただ漠然と海外の地をいうだけだ。〈銅柱標〉は、漢の馬援が交趾を征服して立てたもので、漢のさいはてを表わす。本伝に見える。交趾は中国の南のはてにあり、地続きである。漢は日南・交趾・九真の三郡を置いた。南宋時代になって、別に国をなし安南と号した。

〈冥冥〉は、暗いさま。〈氣稜〉は、妖氣である。明皇（玄宗）は中官の楊思勛を用い、兵に将として交趾を討たせたが、残酷で殺戮を好み、敗れてもどった。代宗の初め、呂大乙も同じく中官で広南市舶使となったが、刺史の張休を放逐して反した。これより嶺南は貢物を献上せず、今に至ってその禍は平らいでいない。それゆえ「首を回らし」て南の天を望み、その地を喪い国土を縮めたことを嘆くのである。

越裳、翡翠無消息

南海明珠久寂寥

越裳、國名、在交趾南。今占城國也。翡翠、南方珍禽。其羽可爲飾。後漢賈琮傳「交趾土多珍產、明璣翠羽瑋瑁異香美木之屬。南海指三珠崖」。前漢西域傳「贊孝武之世、建三珠崖七

郡、自是之後、明珠文甲通犀翠羽之珍、盈于後宮」。此舉三二物以該諸餘珍貢。官司非其人、失撫綏之道、今皆寥絕不復至、不亦可惜乎。

(注10) 邵宝『集註』および薛益『分類』に「越裳は交趾の南に在り」と。前者は宇都宮遷庵の詳説に、後者は増広本にも挙げる。

(注11) 『大明一統志』卷九十、占城国の条に「古の越裳氏の界」と。占城はチャムバ。

(注12) 『後漢書』賈琮伝に「旧と交趾は土に珍産多く、明璣・翠羽・瑋瑁・異香・美木の屬自づから出さざるは莫し」と。璣は、珠の円くないもの。

(注13) 『漢書』卷九十六下、西域伝下の贊に「孝武の世、（中略）故に能く犀布・瑋瑁を睹れば則ち珠崖七郡を建て、枸醬・竹杖に感ずれば則ち牂柯・越嶲を開き、天馬・葡萄を開けば則ち大宛・安息に通ず。是れ自りの後、明珠・文甲・通犀・翠羽の珍、後宮に盈つ」と。文甲は玳瑁。通犀は犀角の一種。

(注14) 『尚書』太甲上に「天厥の徳を監み、用て大命を集め、万方を撫綏す」と。その伝に「天下を撫安せしむるなり」と。

〈越裳〉は、国名で、交趾の南にある。今の占城国である。〈翡翠〉は、南方の珍鳥。その羽は飾りとすることができる。『後漢書』賈琮伝に「交趾の地は珍しい産物が多い。明璣・翠羽・瑋瑁・異香・美木の属」と。〈南海〉は、珠崖を指す。『漢書』西域伝贊に「孝武の世、珠崖七郡を建て、それ以後、明珠・文甲・通犀・翠羽の珍品が、後宮に満ちた」と。ここでは二物を挙げてその他の珍貢を包摂する。担当官がその人にあらず、慰撫安寧の道を失し、今ではいずれも途絶えてもはや至らず、なんとも惜しいことであるかな。

殊錫曾爲大司馬

錫音析、賜也。大司馬、武官之極、故曰殊錫。總戎、大將也。侍中、謂內官。貂音雕、鼠屬。色黃黑、出三丁零國。漢侍

中中常侍冠、加金鎰附蟬、爲文、貂尾爲飾。此言近時出征大將率皆內官珥貂者、不止楊呂二鎰。或有殊錫

加^{ヘラ}大司馬^マ者^者、貴寵極^ル矣。蓋嘆^ニ三^ニ宦官之禍無^レ所^ニ底止^{スル}也。

朱鶴齡^{（注18）}輯註^{（注18）}云、此深^ク戒^ム中官不^レ當^ニ出將^ス也。楊思勳^{（注18）}呂太乙

竝^ニ以^ニ中官^ヲ出^テ征^シ、貽^ス禍^ヲ於^ニ南海^ニ。至^レ今^ニ稷^{（注18）}化^{（注18）}矣。李輔國

以^ニ中官^ヲ拜^ス元帥行軍司馬^ニ、專掌^ス禁兵^ヲ。又拜^ス兵部尚書^ニ。詔^{（注18）}

羣臣^{（注18）}于^ニ尚書省^ニ送上^ス。所謂^ニ殊錫^{（注18）}也。魚朝恩^{（注18）}以^ニ中官^ヲ爲^ス天下^{（注18）}

觀軍容宣慰處置使^{（注18）}。程元振^{（注18）}加^ニ鎮軍大將軍右監門衛大將軍^ニ、

充^ニ寶應軍使^{（注18）}。所謂^ニ總戎^{（注18）}也。此說得^レ之^{（注18）}。但大司馬^{（注18）}ハ謂^{（注18）}拜^{（注18）}

兵部尚書^{（注18）}加^ニ大將軍^{（注18）}等之殊榮^{（注18）}。總戎^{（注18）}謂^{（注18）}掌^{（注18）}禁兵^{（注18）}爲^{（注18）}軍使^{（注18）}

等事^{（注18）}、朱註混^{（注18）}之^{（注18）}。或^{（注18）}以^{（注18）}侍中^{（注18）}爲^{（注18）}當時^{（注18）}門下侍中^{（注18）}、

謂^{（注18）}諸鎮節度多^{（注18）}帶^{（注18）}宰相之銜^{（注18）}、徒^{（注18）}享^{（注18）}尊榮^{（注18）}而^{（注18）}不^{（注18）}能^{（注18）}輸^{（注18）}忠^{（注18）}、

故^{（注18）}責^{（注18）}之^{（注18）}、坐^{（注18）}不^{（注18）}詳^{（注18）}一篇^{（注18）}主意^{（注18）}而誤^{（注18）}也。

（注15） 例えは、『字彙』に「錫、思積の切。音昔。（中略）又た賜なり」と。

（注16） 訳注稿（）、061「將に成都の草堂に赴かんとす。途中作有り。先に嚴鄭公に寄す」五首其五の詳解に「唐、節度使を以て総戎と爲す。猶ほ將軍と言ふがごときなり」と。

（注17） 『字彙』に「貂、丁聊の切、音彫」とあり、『説文解字』九篇下に「鼠の属。大にして黄黒。胡の丁零国より出づ」と。

（注18） 『輯註』に錢注を引いて「此れ朝廷^{（注18）}中に中官をして將^{（注18）}爲^{（注18）}らしむるべからざるを言ふなり。開元中、中官楊思勳兵を將ひて安南五溪を討つ、残酷殺を好んで越裳貢せず。代宗の初め、中官呂太乙珠を広南に収め、兵を阻んで乱を作す。而して南海靖らかならず矣。李輔國は中官を以て元帥行軍司馬を判して、専ら禁兵を掌り、又た兵部尚書に拜せらる。群臣に詔して尚書省に于いて送上す。所謂殊錫なり。魚朝恩は中官を以て天下觀軍・容宣慰處置使と爲る。程元振は鎮軍大將軍・右監門衛大將軍を加へられ、宝應軍使に充てらる。所謂総戎なり」。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

なお、李輔國の伝は、『旧唐書』卷一八四、宦官および『新唐書』卷二〇八、宦者下に見え、こゝは『旧』伝に拠る。李輔國が兵部尚書となつたのは、肅宗の上元二年（七六一）八月のことである。また魚朝恩と程元振の伝は、『旧唐書』卷一八四および『新唐書』卷二〇七、宦者上に見

える。

（注19） ちなみに、錢注に「（総戎皆侍中の貂を挿む）は、當に節度使にして宰相の銜を帶ぶる者を指すべし」と。釈大典「杜律発揮」も同様の注。また『杜律詩話』（卷下）に「諸藩鎮にして宰相を兼ねたる諸將」と解する。

た『杜律詩話』（卷下）に「諸藩鎮にして宰相を兼ねたる諸將」と解する。

（錫）、字音は析、賜である。（大司馬）は、武官の頂点であるから、それゆえ（殊錫）という。（総戎）は、大將である。（侍中）は、内官のこと。（貂）、字音は彫、鼠の属。色は黄黒で、丁零国より出る。漢代の侍中・中常侍の冠は金鑄を加え、蟬を附して文とし、貂尾を飾りとした。これは近時出征の大將はおおむねいずれも内官の貂の飾りを戴んだ者で、ただ楊・呂の二鑄（二人の宦官）だけではないのを言うのだ。或いは（殊錫）もて（大司馬）を加えられる者がおり、貴寵の極みに達した。けれど宦官の禍がとどまらないのを嘆くのである。朱鶴齡の輯註に云う、「これは中官が（朝廷を）出でて將たるべきではないことを深く戒めているのである。楊思勳と呂太乙とともに中官で出征し、禍を南海に貽した。今に至るまで教化を拒んで服従せずにいる。李輔國は中官で元帥行軍司馬を拜命し、専ら禁兵を掌り、さらに兵部尚書を拜命し、群臣に詔して尚書省まで見送らせた。いわゆる（殊錫）である。魚朝恩は中官で天下觀軍容宣慰處置使となつた。程元振は鎮軍大將軍・右監門衛大將軍を加えられ、宝應軍使に充てられた。いわゆる（総戎）である」と。この説はもつともである。但し（大司馬）は兵部尚書を拜命し大將軍を加えられるなどの格別の栄典のことで、（総戎）は禁兵を掌り軍使となるなどのことである。朱註はこれを混同しており粗雑だ。あるいは（侍中）を當時の門下侍中とし、諸鎮の節度使は多く宰相の肩書きを帯び、いたずらに尊貴な栄典を享けるばかりで真心を捧げて尽力することかなわず、それゆえこれを責めたとするのは、一篇の主意を詳らかにしないために誤っているのである。

炎風朔雪天王ノ地 只在忠良翊聖朝

※聖朝：ゴトウダイ

炎風ハ謂^{（注20）}南徼^{（注20）}、即交趾珠崖ノ諸郡。朔雪ハ謂^{（注21）}北塞^{（注21）}、即河朔幽薊等州。安史^{（注21）}餘黨所^{（注21）}盤據^{（注21）}者。此言替天率土^{（注21）}、本皆一統^{（注21）}、無^{（注21）}非^{（注21）}天子之有^{（注21）}、所謂自南自北無^{（注21）}思^{（注21）}不^{（注21）}服^{（注21）}者。而中官出^{（注21）}將^{（注21）}喪^{（注21）}地^{（注21）}蹙^{（注21）}域^{（注21）}、或^{（注21）}逆黨割據^{（注21）}、未^{（注21）}歸^{（注21）}版圖^{（注21）}。竊^{（注21）}爲^{（注21）}國家^{（注21）}憂^{（注21）}之^{（注21）}、慨^{（注21）}焉^{（注21）}不^{（注21）}禁^{（注21）}痛憤^{（注21）}。只冀^{（注21）}得^{（注21）}忠良之臣^{（注21）}、以翊^{（注21）}聖朝之政^{（注21）}、須^{（注21）}使^{（注21）}天下^{（注21）}復^{（注21）}歸^{（注21）}一統^{（注21）}。安^{（注21）}得^{（注21）}用^{（注21）}刑餘^{（注21）}小人^{（注21）}、據^{（注21）}將帥之重任^{（注21）}、自取^{（注21）}潰^{（注21）}潰^{（注21）}乎^{（注21）}。深^{（注21）}慨^{（注21）}時弊^{（注21）}、立意如此^{（注21）}。而詞旨溫厚^{（注21）}、蘊藏^{（注21）}不^{（注21）}露^{（注21）}、寔^{（注21）}苦心之作也。蓋官軍出征^{（注21）}、各有^{（注21）}中使^{（注21）}監^{（注21）}軍^{（注21）}、主將不^{（注21）}得^{（注21）}專^{（注21）}進退^{（注21）}、皆從^{（注21）}其指揮^{（注21）}、故^{（注21）}宦官弄^{（注21）}權^{（注21）}掣^{（注21）}肘^{（注21）}、沮^{（注21）}抑^{（注21）}忠良之氣^{（注21）}。當時軍國之事^{（注21）}、往往由^{（注21）}是而敗^{（注21）}。故^{（注21）}特^{（注21）}曰^{（注21）}、只在^{（注21）}忠良翊^{（注21）}聖朝^{（注21）}。其欲^{（注21）}彼黜^{（注21）}而此伸^{（注21）}、意在^{（注21）}言表^{（注21）}矣。

（注20） 訳注稿(九)、071「嚴大夫に奉侍す」詩の詳解に「微音叫。西南の境界を

微と曰ふ。猶ほ東北之を塞と謂ふがときなり」と。

（注21） 天が下、地のはてまでの意。「詩経」小雅・北山に「溥天の下、王土に非ざる莫く、率土の濱、王臣に非ざる莫し」と。「溥」は「普」と同じ。

「左伝」昭公七年、「孟子」万章上には「普」に作る。

（注22） 『詩経』大雅・文王有声に「鎬京辟廱、西自東自、南自北自、思うて服せざる無し」と。なお、「孝経」感應章にも「自西自東」以下の句を挙げるが、東陽の「孝経發揮」には「思不服」に「コ、ロニカ、ルホドノトコロハ」と左訓を施す。

（注23） 輯註に錢注を引いて「只だ當に忠良を精求し以て聖朝を翊くべし。豈に一二中人をして將帥の重任に拠つて、自ら潰潰を取らしむ可けんや」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。潰潰は、失敗。

（注24） 輯註に（注23）に挙げた箇所に続けて「立意此の如し。而して詞旨敦厚、頭角を露さず、真に詩人の風なり」と。宇都宮遷庵の増広本にも引く。

（注25） 干渉して人の行動を妨げること。「書言故事」卷五に、「掣肘」の語を

挙げ、「事の為に牽奪せらるるを掣肘と曰ふ」と。もとは春秋魯の宓子賤の故事（「呂氏春秋」審慮覽、具備篇）。

《炎風》は、南徼のこと。とりもなおさず交趾・珠崖の諸郡。《朔雪》は、北塞のこと。とりもなおさず河朔・幽薊等の州。安史の殘党が盤踞している地域。これは普天率土は本来すべて一つに統べ合せ、天子の有するところでないものはないのいい、いわゆる「南自北自り、思うて服せざる無し」というものであるが、中官が出でて將となり領土を失い封域を締め、或いは逆党が割拠し、いまだ版圖を帰さずにいる。ひそかに國家のためにこれを憂い、慨焉として痛憤を禁じえない。ただ願わくはどうか《忠良》の臣を得て、それで《聖朝》の政を《翊》けたい、天下を再び一統に帰さねばならぬ。どうして刑餘の小人を用いて、將帥の重任に拠らし、自ら失敗を招かせることができようか。深く時弊を慨嘆して、主意を立てることかかかる具合である。しかしして詞旨は温厚で、深く蘊み藏して露わでなく、まことに苦心の作である。けれど官軍の出征には、それぞれ中使がいて監軍し、主將は進退を専らにするを得ず、皆その指揮に従った。それゆえ宦官は權力を弄し口を挟んで干渉し、《忠良》の氣を挫いた。当時、軍事を統べ國家を治めることは、たびたびそれが原因で損なわれた。それゆえ特に《只だ忠良聖朝を翊くるに在り》という。そのあちらを黜けてこちらを伸ばそうとしており、意は言表にある。

078 其五

此首追贊嚴武ノ將略ヲ、并懷知己ノ恩遇也。案前四首ハ、一二章法相似。三四亦自一對。此首ハ則別爲一體。可レ見良工鑪錘之巧一也。

（注1） 鑪錘は、陶鑄、精鍊。例えば、南朝梁の劉峻「広絶交論」（「文選」卷五十五）に「百工を彫刻し、万物を鑪錘す」と。捶は、錘と同じ。ふい

う。

この一首は、後から追って嚴武の將略を讃え、それとともに知己の恩遇を懐うのである。案ずるに、前の四首は、其一・其二は章法が似かよっており、其三・其四もそれ自体で対になっている。この一首は別に一体をなしている。良工の練りに練った技巧を見るべきである。

錦江ノ春色逐人來

巫峡清秋萬壑哀

※哀：ウレハシ、

逐ハ猶随ノ也。人ハ公自謂也。公在蜀數年、錦江ハ即其所レ

居リ。花竹清幽、備載于詩。今離蜀南下、猶依依懷想ス。

風景悵悵、心目、居常不違顔、殆若逐我來者然也。

公懷錦水居止詩、惜哉形勝地、回首首一茫茫。其餘戀

戀草堂、數見集中。葛常之韻語陽秋言其詳矣。

公今所居、即錦江下流、故曰逐人來。巫音武。巫峽ハ屬夔

州。公寓雲安縣、即其處也。哀ハ謂秋氣悵悵。水經注

江水歷峽東。逕新崩灘、其下十餘里有大巫山。非唯三峽

所無、乃當抗峯岷峨、偕嶺嶺疑。其間首尾一百六十里

謂之巫峽。蓋因山爲名也。其地陋隘如此。而時值秋

候、萬壑氣色悵悵、轉不可堪也。錦江與巫峽、

地名美惡相反。亦見苦此慕彼、所以追憶嚴僕射也。

今年四月、嚴武卒。五月、公辭成都南下。秋至雲南居

之。相去僅三三月也。

(注2) ちなみに、邵傳『集解』に「逐人」の下に「我を驅る」と注する。

(注3) 悵悵は、憂い悲しむさま。例えば、盛唐の李華「古戰場を弔ふ文」(『全

唐文』卷三二)／『古文真寶』後集卷四)に「心目に悵悵として、寤寐

に之を見る」と。

(注4) この言い方、『左伝』僖公九年に「天威顔を達ること咫尺ならず」と見

(注5) 「錦水の居止を懐ふ」詩二首其二(詳註卷十四)に、

萬里橋西宅 萬里橋西の宅

百花潭水莊 百花潭水の莊

層軒皆面水 層軒 皆水に面し

老樹飽經霜 老樹 飽くまで霜を経

雪嶺界天白 雪嶺 天に界して白く

錦城曠日黃 錦城 曠日黄なり

惜哉形勝地 惜しい哉 形勝の地

回首一茫茫 首を回らせば一に茫茫

(注6) 南宋・葛立方(常之)の『韻語陽秋』卷六に「老杜、(中略)蜀に入り

嚴武に依りて自り、始めて草堂の居有り、其の經營往來の勞、備さに詩

に載せ、皆攷す可し」として、その具体例を挙げ、更に「然れども未だ

黔突に及ばずして、成都の乱を避け、梓に入り夔に居る。其の心は則ち

未だ嘗て一日として草堂にあらずんばあらざるなり」と述べて、やはり

詩例を示す。黔突は、『淮南子』脩務訓に「孔子黔突無く、墨子煖席無

し」と見え、煙突が煤けて黒くなること、すなわち一箇所に長く止住す

ることをいう。

(注7) 『水経注』卷三十四に「江水峽を歴て東す。新崩灘を逕。(中略) 其の

下十餘里、大巫山有り。惟だ三峽の無き所に非ず、乃ち当に峯を岷峨に

抗し、嶺を衡疑に偕にすべし。(中略) 其の首尾の間一百六十里、之を巫

峽と謂ふ。蓋し山に因つて名と爲すなり」と。岷峨は、岷山と峨眉山。

衡疑は、衡山と九疑山。

(注8) 宇都宮遐庵の増広本に挙げる明・單復の年譜、永泰元年(七六五)の

条に「四月、嚴武卒す。五月、遂に蜀を離れて南に下る。戎州自り渝州

に至る。六月、忠州に至る。秋、雲安に至つて之に居る」と。

《逐》は、随とは同じ。《人》は、公自らの謂である。公は蜀にあ

ること数年、「錦江」は、とりもなおさずその居住せしところ。花竹

の清幽なること、つぶさに詩に載せる。今、蜀を離れて南に下るが、

やはり後髮引かれて懷想する。風景は心目に物悲しく写り、いつも

頭から離れず、ほとんど自分を《逐》つて《來》るもののようにであ

る。公の「錦水の居止を懐ふ」詩に「惜しい哉形勝の地、首を回ら

して一に茫茫」と。そのほか草堂に恋恋としていること、しばしば集中に見える。葛常之『韻語陽秋』にこれを言つて詳らかである。

公の今の住まいはとりもなおさず（錦江）の下流であるから、それゆえ（人を逐つて来る）という。（巫）、字音は武。（巫峡）は、夔州に属する。公は雲安県に寄寓したが、とりもなおさずその場所である。（哀）は、秋気の悲惨なること。『水経注』に「江水は峡をへて

東にゆく。新崩灘をへ、その下流十餘里に大巫山がある。ただ三峡にないものであるばかりでなく、なんとその峰嶺は岷山や峨眉山に匹敵し衡山や九疑山と肩を並ぶべきものである。その間首尾一百六十里、これを巫峡という。けだし山にちなんで名としたのであろう」と。その地の陋隘なることかくのごときである。そして時は秋候にあたり、〔万壑〕の気色は悽愴として（人）を愁えさせ、ますますがまんができないのである。（錦江）と（巫峡）とは、地名の美悪が相反する。やはりこちらを苦しみあちらを慕うのがみてとれる。（嚴僕射）を追憶するゆえんである。今年四月、嚴武が卒した。五月、公は成都を辞して南に下った。秋、雲南〔安〕に至つて居住した。その間たつた三ヶ月である。

正憶往時嚴僕射 共迎中使望鄉臺

※憶：オモヒダサル、中使：チヨクシ

射音夜。嚴武卒、贈尙書左僕射。公追念知己恩遇、尤惜其材略、不能忘懷也。天子私使曰中使。望鄉臺在成都之北、隋蜀王秀所築、爲蜀之名勝。公爲節度參謀時、嘗有勅使將命至蜀、公隨武登此臺、以迎接之。亦爲一時盛事。蓋其時當此節、勝地、秋景、大賓、饗宴、宛然在目、故特感而思之也。顧註：公往在嚴公之幕、嚴公表公爲工部員外郎、朝廷爲遣中使銜命而來。公與嚴公共於望鄉臺迎之、此其最所深感、故特三言之。

宣其然矣。

〔注9〕邵傳『集解』に「射」字の下に「音夜」と注する。

〔注10〕『新唐書』卷二二九、嚴武伝に「永泰の初め卒す。（中略）年四十、尚書左僕射を贈らる」と。尚書左僕射は、左丞相ともいい、尚書六部を統轄する。從二品。

〔注11〕『文選』卷五十九、梁・沈約「齊の故の安陸昭王の碑文」に「膳を勉め哭を禁じ、中使相望む」とあり、五臣張銑注に「天子の私使を中使と曰ふ」と。

〔注12〕薛益『分類』に「望鄉台は、成都の北に在り、隋の蜀王秀の築く所」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔注13〕顧宸『註解』に「公、昔、武の幕に在り。武、公を表して工部員外郎と爲す。朝廷允すに依つて、故に中使命を銜みて來たる。公、武と共に望鄉台に于いて之を迎ふ。此の一事を憶うて以て深感を致す」と。宇都宮遷庵の両著にも挙げる。

〔注14〕これに類似した言い方として、例えば『詩經』小雅・常棣に「是に究め是に図る、實に其れ然らん乎」とあり、毛伝に「實は信なり」と。

〔射〕、字音は夜。嚴武は卒して尙書左僕射を贈られた。公は知己の恩遇を追念し、とりわけその材略を惜しみ、胸中より忘れることができないのである。天子の私使を（中使）という。（望鄉台）は、成都の北にあり、隋の蜀王秀が築いたもので、蜀の名勝である。公が節度參謀となつた時、かつて勅使が命を奉じて蜀にやつてきたが、公は嚴武に随つてこの台に登り、これを迎えて接待した。やはり一時の盛事である。けだしその時はこの季節にあたり、形勝地の秋景色や大事な賓客をもてなす饗宴の様子が、ありありと目に浮かび、それゆえ特に心感じてこれを思うのである。顧註に「公はさきに嚴公の幕にあり、嚴公は公のことを上表して工部員外郎とし、朝廷はそのため中使を遣わし命を銜んでやつてきた。公は嚴公と共に（望鄉台）においてこれを迎えたが、最も深く心感じたことであつて、それゆえ特にこれを言う」と。まことにそれその通りであろう。

主恩前後三持節 軍令分明數（擧）杯

持節ハ節ヲ謂レ賜ニ旌節ヲ、詳ニ見ニ于前。武一々鎮シ東川一兩々鎮シ成都

都^一、故^二曰三^レ持^レ節^一。數^レ舉^ハ杯^ヲ言^フ多^ク餘^リ暇^一、有^二雅歌投壺^一、氣象。蓋^レ號令嚴明、節制肅然、故^二軍政無事、幕府清閑。左氏所謂整暇^{ナル者}者。抑^レ亦折^二衝樽俎^一之意、自在^二言外^一。於是^二公每^二陪^レ宴^一、詩酒從容、談笑盡歡。所^二以尤念^一也。

(注15) 訳注稿(九)、071「嚴大夫に奉待す」詩の詳解。

(注16) 輯註に「嚴武一たび東川に鎮し再び劍南に鎮す、故に三たび節を持すと曰ふ」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注17) 『後漢書』祭遵伝に「祭遵、將軍爲るも、士を取るに皆儒術を用ひ、酒に對して樂を設け、必ず雅歌投壺す」と。(『雅歌』は、小雅・大雅の詩を歌うこと。『投壺』は、壺の中に矢を投げ入れて勝負を競ひ、負けた者が罰杯を受ける遊び。『札記』投壺に見える。

(注18) 『左伝』成公十六年に、晋の欒鍼の語として「子重(楚の公子嬰齊)、晋国の勇を問へり。臣對へて曰く、好んで樂を以て整すと。曰く又た何如と。臣對へて曰く、好んで暇を以てすと」と。整は整然、暇は余裕のあること。

(注19) 折衝樽俎は、酒宴の間に敵の意志をくじき、勝ちを制すること。『晏子春秋』雜事に「樽俎の間を出でずして、千里の外に折衝すとは、晏子の謂なり」と。西晋の張協『雜詩』十首其七(『文選』卷二十九)に「衝を樽俎の間に折き、勝ちを制するは兩楹に在り」と。

〔節を持す〕は、旌節を賜わること、詳しくは前に見える。嚴武は一たび節度使として東川を治め再び成都を治めたので、それゆえ〔三たび節を持す〕という。〔数しは杯を挙ぐ〕は、餘暇が多いの言い、「雅歌投壺」の氣象がある。ただし号令は嚴格明瞭で、規律正しく肅然としており、それゆえ軍事や行政にはさしたる事もなく、幕府は暇であつたのだらう。『左伝』のいわゆる「整暇」というものである。そもそもやはり衝を樽俎に折くの意が自ら言外にある。かくて公はつねに宴に陪し、ゆるりと酒を飲み詩を賦し、談笑して飲を尽くした。とりわけ忘れられずなつかしく思うゆえんである。

西蜀地形天下險 安危須仗^レ出羣^一才

※險：ヨウガイ 安危：タイセツ

易^二云、地^一險^ハ山川邱陵。王公設^レ險^ヲ以守^二其國^一。蜀^ノ地山川要害爲^二天下至險之境^一。北走^二秦鳳^一有^二鐵山劍閣之塞^一。東下^二荆襄^一有^二瞿唐滄瀨之灘^一。西南^ハ接^二吐蕃雲南^一。姦逆^レ荐^レ興^一、虜寇屢^レ擾。苟^モ見^二割據^一、征討甚難。故^二劍南節度^一、寔^二爲^二重任^一、安危^ノ所^レ係^一。須^レ選^二良將^一。武以^二出羣^一英才^一、直^二挫^二吐蕃^一、嚴^二固^二疆場^一、危邦便安^一、全蜀是賴。眞^二勝^二其任^一而愉快^一矣。公追悼^二詩云、公來^二雪山重^一、公去^二雪山輕^一、是也。奈何^一早世不^レ竟^二其用^一。今也則^レ亡^一。殊^二可^二痛悼^一。實^二爲^二國家惜^一之。不但^レ知己之感^一也。杜鴻漸代^レ武^二節度^一成都、恐^二不^レ勝^二西蜀要鎮之任^一、所以益使人^一思^二嚴公^一不^レ置也。安危^ハ謂^二安危^一所^レ係^一、舊解^二安安^一其危^一、迂^一矣。

(注20) 『易』坎卦に見える。

(注21) 今の甘肅省天水県。宋代に秦鳳路が置かれた。鉄山は、甘肅省徽県の南。

(注22) ちなみに、『夜航詩話』卷三に「疆場は左伝に出づ。場は音易。疆土此に至りて易るを言ふなり」と。『左伝』は桓公十年。

(注23) 『史記』卷一二二、酷吏列伝の序に「武健嚴酷に非ざれば、悪んぞ能く其の任に勝へて愉快せんや」と。

(注24) 「八哀」詩其三「贈左僕射鄭国公嚴公武」(詳註卷十六)。

(注25) この言い方、『論語』雍也篇および先進篇に、顔回について「不幸短命にして死せり矣。今や則ち亡し」と見える。

(注26) 杜鴻漸については、『旧唐書』卷一〇八、『新唐書』卷一四六に伝がある。

(注27) 顧宸『註解』に「今、天下最險の地を以て僅かに杜鴻漸に倚りて危を安んずると爲す。蓋し人をして嚴を思つて置かざらしむる耳」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注28) 邵傳『集解』に「其の危を安んず」と。また顧宸『註解』に「危を安んずるは、其の危を安んず」と。

『易』に云う、「地の險は山川邱陵。王公は險を設けて以て其の国を守る」と。蜀の地は山川の要害が天下でもっとも險しい所である。

北のかた秦鳳に走るには、鉄山・劍閣の塞があり、東のかた荆襄に下るには、瞿唐・灩澦の灘がある。西南は吐蕃・雲南に接する。姦逆がしきりに興り、虜寇がしばしば侵し乱した。もしも割拠されると、征討するのは甚だ困難である。それゆえ劍南節度使はまことに重任であつて、〈安危〉の係るところである。どうしても良将を選ばなければならぬ。嚴武は〈出群〉の英れた〈才〉をもつて、直ちに吐蕃を挫き、嚴重に国境を固め、政情不安が収まり、蜀中が頼りとした。まことにその任務を遺憾なく遂行して心に満足をしたのである。公の追悼の詩に「公来つて雪山重く、公去つて雪山軽し」というのが、そうである。どうして早世してしまい、そのはたらきを全うしなかつたのか。今ではもういない。ことのほか痛悼すべきである。実に国家のためにこれを惜しんでおり、ただ知己としての感慨ばかりではないのだ。杜鴻漸が嚴武に代つて成都に節度使として赴任したが、おそらくは西蜀要鎮の任にたえられまい、ますます人に嚴公を思つてやまなくさせるゆえんである。〈安危〉は、安危の係るところ。旧解に「安は其の危を安んずる」とするのは、まわりくどくて適切ではない。

079 十二月一日三首（其一）

雲南地暖ナリ。時方臘月朔ニシテ、而江上ノ物色已ニ含ム春意ヲ。故ニ感ニ殊方ノ節候ニ、而述ニ其旅懷ヲ也。亦一時ノ漫筆耳。

（注1）〈雲南〉の〈南〉は、〈安〉の誤り。以下、同じ。

雲南〔安〕は地暖かく、時はちようど臘月朔にして、江上の物色はもう〈春意〉を含んでいる。それゆえ異域の節候に感じて、その旅懷を述べるのである。やはり一時の漫筆だ。

今朝臘月春意動 ヲ 雲安縣前江可憐ム

※可憐：イタハシヤ

今朝始テ入ニ臘月ニ、寒氣當ニ愈甚ニシテ、而雲南冬暖ニシテ、春意已ニ

動ク。縣前ノ江色、眺望可レ憐ム也。公寄「常徵君」詩ニ開州ハ入レテ夏ニ知ル冷ナリ、不レ似雲南毒熱新ナルニ。夫初夏已ニ毒熱、則冬暖ナルコト可レ知矣。蓋地勢卑、爲ニ山嵐鬱掩シ、如レ坐ニ甌中ニ也。憐ニ謂ニ惆悵也。

（注2）「今朝」について、東陽は「けさ」の意に解したと思われるが、ここは俗語で「今日」の意であろう。なお、鈴木虎雄『杜少陵詩集』（卷十四）もやはり「けさ」とする。

（注3）0131「常徵君に寄す」詩の第七・八句。

「今朝」やつと〈臘月〉に入つたばかりで、寒氣は当然いよいよ厳しくなるはずなのに、雲南〔安〕は冬暖かで、〈春意〉がもう〈動〉きはじめている。〈県前〉を流れる長江の景色は、眺望するに〈憐れむ可〉きである。公の「常徵君に寄す」詩に「開州は夏に入つて知る涼冷ならん、似ず雲南〔安〕毒熱新なるに」と。いったい初夏にもう「毒熱」であれば、冬暖かなことは知れよう。けだし地勢低く蒸し蒸しとした山氣のために鬱陶しく掩われ、甌の中に坐しているかのようなのである。〈憐〉は、惆悵することである。

一聲何ノ處ニ送書雁 百丈誰ノ家ニ上瀨船

雁足繫書ヲ、蘇武ノ故事。百丈巴人挽船纜ノ名。峽中崖石如レ齒、非ニ麻索紉繩之爲ニ前牽。故ニ以ニ巨竹ヲ四破シテ而用ニ麻繩ヲ連貫シテ、以牽ニ逆レ流ニ之船。百丈以ニ其長一名也。瀨ハ灘也。漢書下瀨將軍註引伍子胥有下瀨船、此反用之。二句乃江可レ憐之景。蓋江頭春意已ニ動、雁有ニ北ニ飛之聲、感シテ送書故郷ニ之事也、而恨レ不レ得レ附レ書ニ以テ信。適ニ見ニ上瀨ニ之船。或ハ亦中原之人。吾欲ニ下レ峽而去ニト、彼ハ則向レ蜀ニ而行ク。耳目ノ所觸、皆感ニ郷情ヲ、所以惆悵相憐ム也。

（注4）〈瀨〉字、錢注（卷十四）および輯註（卷十二）は、〈水〉に作り、「二に瀨に作る」と注す。

（注5）顧宸「註解」に「雁足に書を繫ぐは、相沿して蘇武が事と爲す」と。宇都宮遼庵の両著にも挙げる。

(注6) 輯註に「王周が峽船具詩の序に、岸岩齒の如く、麻索紉繩の前牽を為すに非ず」云々と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。五代・王周の作は「峽の船具を誌す詩並びに序」として、『全唐詩』巻七六五に見える。ちなみに、韓成武他の点校本『杜工部詩集輯注』（河北大学出版社、二〇〇九年）に王周峽《船具詩序》とするのは、誤まり。

(注7) 顧宸『註解』に「漢書下瀨將軍の注に伍子胥に下瀨船有るを引く、此の詩之を反用す」と。宇都宮遼庵の両著にも挙げる。『漢書』卷六、武帝紀、元鼎五年の条に「甲を下瀨將軍と為す」とあり、臣瓚の注に「瀨は湍なり。吳越之を瀨と謂い、中国之を瀨と謂ふ。伍子胥書に下瀨船有り」と。

《雁》の足に《書》を結ぶのは、蘇武の故事。《百丈》は、巴人が船を引く纜の名。峽中の崖石は齒のごとくして、麻製のロープでは前から牽けない。それゆえ巨竹を四つ裂きにして麻縄で連貫し、流れを遡る船を牽く。《百丈》は、その長さから名づけたのである。

《瀨》は、灘である。『漢書』の「下瀨將軍」の注に伍子胥に下瀨船があるのを引くが、ここではこれを逆にして用いる。この二句が江の《憐れむ可》き景色だ。けだし江のほとりでは《春意》がもう《動き出し》、《雁》には北に飛んでかえる《声》あり、《書》を故郷に《送る》故事に心感じて、信を附することができないのを恨んでいると、おりしも《瀨を上》つてくる《船》を見た。ひよっとして同じく中原の人であろうか。自分は峽を下つてゆこうとするが、彼は蜀へ向つて行く。耳目の触れるところ、どれも郷情を感じる。惆悵して相《憐》れむゆえんである。

末將梅蕊驚愁眼上 憂取椒花媚遠天

※取ニテ 椒花…トソシユ 媚…カアヒガラル

將ハ以也。驚ハ言驚感スルヲ年光ニ。何遜詩驚時最是梅。此用其意。蓋今春意雖動、而梅蕊猶含。幸ニ其不驚愁眼、即和裴迪詩「幸不折來傷歲暮」意、不欲見也。驕人愛梅、言雪探春、今乃如是。何等境界。取亦猶以也。

與下憂取金陵作小山、直取流鶯送酒杯同。椒花ハ謂二元日椒酒。今臘月朔、獻歲在近、故及之。媚即十九首「入門各自媚之媚。言親愛也。晉書劉琨妻陳氏聰慧、能屬文、元日獻椒花頌。此暗用其事、以內人從行也。遠天、遠方之天、謂身在殊方也。蓋惟酒可以遣愁、故預念歲旦椒花之酒、雖身在天涯之鄉、而亦能隨例設儀、因家人之親愛、以邀新禧之歡也。

(注8) 《更》字、錢注および輯註は《要》に作り、輯註に「黄は更に作る」と注する。黄は黄鶴のこと。

(注9) ちなみに、積大典『文語解』卷五に「詩語ニ以ノ義ニ用ユ」と。

(注10) 詠注稿(六)、033「裴迪蜀州の東亭に登つて客を送る、早梅に逢ひて相憶ふて寄せらるるを和す」詩の(注10)参照。

(注11) 顧宸『註解』に「梅冬尚ほ蕊。今春意動くと雖も、而れども梅蕊猶ほ含む」と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

(注12) (注10)に挙げた033「裴迪に和す」詩の第五句。

(注13) 李白「永王東巡歌十一首」其十「分類補註李太白詩」卷八／『全唐詩』卷一六七の結句。

(注14) 積大典『詩語解』卷下、取の条に、この「直取流鶯送酒杯」という句例を挙げる。これは、中唐の郎士元「春に王補闕が城東の別業に宴す」詩（『全唐詩』卷二四八）の第四句。

(注15) 『荆楚歲時記』正月の条に「按ずるに四民月令に云はく、臘を過ぐること一日、之を小歳と謂ひ、君親に拝賀す。椒酒を進むるは、小より始む。椒は玉衡星の精にして、之を服すれば人をして身軽くして老いに能へしむ」と。椒酒は、山椒から作った酒。

(注16) 獻歲は、元日。戦国楚の宋玉「招魂」(『楚辭』卷九、『文選』卷三十二)に「獻歳の發春に、汨として吾れ南に征く」とあり、王逸の注に「獻は進なり」と。

(注17) 「古詩十九首」(『文選』卷二十九)ではなく、古樂府「飲馬長城窟行」(同上卷二十七)の第十一句。輯註には「媚は即ち古樂府の《門に入りて各自媚む》の媚」と。

(注18) 『晉書』卷九十六、列女伝に「劉臻の妻陳氏は、亦た聡辯にして能く文

を属す。嘗て正旦に〈椒花の頌〉を献す。其の詞に曰く、旋穹周迴し、三朝肇めて建つ。青陽輝を散じ、澄景載ち煥く。標美靈葩、爰に採り爰に献す。聖容之に映じ、永く万よりも寿なり、と。又た元日及び冬至進見の儀を撰し、世に行なはる」と。

なお、劉臻が妻の故事は、顧宸『註解』にも挙げるが、それには「晋の劉臻が妻、元日椒花の頌を献す。公、園樹を視る詩に〈梔子紅椒葩にして復た殊なり〉と。故に椒花も亦た媚と言ふ可し。此の時椒盤已に媚す、公急に之を取り以て春意の動くを徴とするなり」と解し、東陽のごとく杜甫の妻に言及したものではない。「註解」によれば、第六句は「更に椒花の遠天に媚ぶるを取らんとす」と訓ずることになる。

《将》は、以である。《驚》は、年光に驚き感ずるのを言う。何遜の詩に「時を驚かす最も是れ梅」と。これはその意を用いる。けれど今《春意動く》とはいえ、《梅蕊》は、なお荅のまま、《愁眼》を《驚》かさないのであつたの幸いだ。とりもなおさず「裴廸に和す」詩の「幸いに折り来つて歳暮を傷ましめず」の意にほかならず、見たくないものである。騷人墨客は梅を愛し、雪を言つて春を探すのに、今はかえつてかかるしだいである。何という状況か。《取》も、以とほぼ同じである。「更に金陵取て小山と作す」、「直ちに流鶯取て酒杯を送る」と同じ。《椒花》は、元日の椒酒のこと。今は臘月の朔で、新しい歳は間近に迫り、それゆえこれに言及する。《媚》は、とりもなおさず「古詩十九首」の「門に入りて各自媚む」の媚。親愛するのを言うのである。『晋書』に「劉臻の妻陳氏は聡慧にして能く文をつづり、元日に〈椒花の頌〉を献じた」と。ここでは暗にその故事を用いる。内人が随行しているためである。《遠天》は、遠方の天。身が異域にあることである。けれど、ただ酒だけが愁いを遣ふことができる、それゆえあらかじめ心をめぐらせて、歳旦《椒花》の酒は、身は天涯の郷にあるとはいえ、やはりよく恒例に随い形をととのえられる、家人の親愛によって、新禧の歡を迎えようと思ふのである。

明光起草（人ノ所羨） 肺病幾時朝ニ日邊ニ

明光（漢殿名） 漢尚書侍郎掌詔詔起草。直建禮門ニ、奏ス事ヲ

明光殿ニ。千家註引漢王商借明光殿起草（作中） 詔詔（上）、亦杜

撰耳。日邊（謂） 帝都。本晋明帝語。公嘗逢榮薦（爲） 工部

員外郎屬尚書省。然實未拜官于朝、今老患肺病、

恐遂不復能趨朝也。唐尚書郎、與漢尚書郎、其職

不同。但以名同用之爾。蓋公徒帶朝官之銜、而未嘗

供其職、以奉文書之用。乃爲老病所困、將終爲南中之

鬼。故深々自惜也。舊說明光起草、借言獻三大禮賦

事。即公詩所云、集賢學士如堵牆、觀我落筆中書

堂、是也。夫中書獻賦、與尚書草詔、事體殊不

同。安得敢自比（スルコトヲ） 乎。可謂妄耳。公詩數言肺病

消渴。讀者以爲借用相如故事、文人稱病語耳。

案スルニ公寄劉伯華詩割愛酒如澠自註、平生所好、消渴

止之ヲ。是實病肺也。

〔注19〕 薛益「分類」（卷二、四時）に見える。

〔注20〕 「李校書を送る二十六韻」詩（詳註卷六）に「汝が翁明光に草す、天子正に席より前む」とあり、轉註（卷四）に「漢官儀」を引いて「尚書郎は建礼門に直宿し、事を明光殿に奏す」と。

〔注21〕 『集千家註』（卷十二）に王洙注の「明光は、殿名。漢の王商、明光殿を借りて草を起し詔詔を作る」というのを挙げる。

〔注22〕 宇都宮遷庵の詳説は、邵宝『集註』（卷二十二、時序類）に「日辺は帝都なり」とあり、また会粹（卷十四）に東晋・明帝の故事を引くのを挙げる。明帝（司馬紹）がまだ数歳の子供のころに、父の元帝（司馬勲）から、長安と太陽とどちらが遠いかと問われて、最初「日遠し。人の日辺従り来たるを聞かず」と答えたが、翌日同じ質問をされると、太陽は見えるが、長安は見えないから、太陽が近いと答えたという（『世説新語』風患篇）。

〔注23〕 顧宸「註解」に「王槐野曰く、漢の制、尚書郎内直起草す。公は嚴が幕の参謀に辟せられ、名は檢校員外郎爲るも、実は未だ官を朝に拝せず。

末二句は企慕の詞」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。王槐野は明・王維楨（字は允寧、一五〇七―一五五五）のこと。「杜律頗解」二巻がある。

(注24) 南中は、蜀（四川省）を指している。訳注稿(六)、031「野老」詩の（注13）参照。

(注25) 邵傳『集解』に「明光起草」の下に「公、三大礼賦を献ず」と注する。

(注26) 「莫相疑行」（詳註巻十四）の第五・六句に「集賢の学士堵牆の如し、我の筆を中書堂に落とすを觀る」と。集賢殿の学士たちが人垣をつくつて、自分が中書堂で文章を書くのを見物したという意。

(注27) 杜甫が肺の病氣（喘息）に言及する例として、

・我が為に賈公に謝せよ、肺を病んで江沱に臥すと

（「唐十五識に別る。因つて礼部賈侍郎に寄す」詩、詳註巻十四）

・衰年肺を病みて唯だ枕を高うす、絶塞時を愁へて早く門を閉つ

（「返照」詩、詳註巻十五）

・肺萎む久戦に属し、骨出でて中腸熱す

（「又た後園の山脚に上る」詩、詳註巻十九）

・肺枯れて渴すること太甚なり、漂泊す公孫城

（「元使君の春陵行に同ず」詩、詳註巻十九）

・高秋 肺氣蘇り、白髪自ら能く梳づる

（「秋清」詩、詳註巻十九）

・江濤万古の峽、肺氣久衰の翁

（「秋峽」詩、詳註巻十九）

・帰朝 病肺に跼し、叙旧 重ねて陳べんことを思ふ

（「敬んで族弟唐十八使君に寄す」詩、詳註巻二十二）

・肺肝若し稍や愈ゆれば、亦た赤霄に上つて行かん

（「覃二判官を送る」詩、詳註巻二十二）

という句が見え、

また消渴については、次の080に「新亭目を挙げて風景切なり、茂陵書を著して消渴長し」というほか、

・我消渴甚だしと雖も、敢へて忘れんや帝力の勤むるを

（「蔡十四著作に別る」詩、詳註巻十四）

・消渴 今 此の如し、提携 老夫愧づ

（「蘇侯に別る」詩、詳註巻十八）

・消渴 江漢に遊ぶ、羈棲 尚ほ甲兵

（「熟食の日、宗文・宗武に示す」詩、詳註巻十八）

・飄零仍ほ百里、消渴已に三年

（「秋日夔府詠懷、鄭監・李賓客に寄せ奉る一百韻」詩、詳註巻十九）

九）

という例がある。

(注28) 「劉峽州伯華使君に寄す、四十韻」詩（詳註巻十九）の第七十六句の自注に「平生好む所、消渴之を止む」と。「左伝」昭公十二年に「酒有り濕の如く、肉有り陵の如し」と。

《明光》は、漢の宮殿の名。漢代の尚書侍郎は詔詔の起草を掌り、建礼門に宿直して、明光殿に上奏した。千家註に漢の王商が明光殿を借りて起草して詔詔を作ったことを引くのは、例によって杜撰だ。《日辺》は、帝都のこと。晋の明帝の語に本づく。公はかつて榮えある推薦に逢い工部員外郎となつて尚書省に属した。されど實際はいまだ官を朝に拝さず、今では年老いて肺病を患い、おそらくはこのまま二度とは朝廷に趨走することができないのである。唐代の尚書郎は、漢代の尚書郎とその職務は同じではない。ただ名称が同じであるから用いたまでだ。けれど公はいたずらに朝廷の官職の肩書を帯びるだけで、いまだかつてその職に供して文書の用を奉じたことがなかった。かえつてなんと老病のために困しめられ、しまいは南中の亡者となりはてようとしている。それゆえ深く自ら惜しんでいるのである。旧説に、《明光起草》は借りて「三大礼の賦」を献じたことを言い、とりもなおさず公の詩に「集賢の学士堵牆の如し、我の筆を中書堂に落とすを觀る」と云うのがそうであると。そもそも中書省に賦を献上するのと尚書省に詔を起草するのでは、事柄自体がちつとも同じではない。どうして進んで自ら比すことができようか。でたらめというべきだ。公の詩にしばしば《肺病》《消渴》を言う。読む者は司馬相如の故事を借用して文人が病を称する常套

語だとみなが、案ずるに公の「劉伯華に寄す」詩の「愛を割く酒
澠の如し」の自註に「平生好む所、消渴之を止む」とあるのは、実
は肺を病んでいたのである。

080 (其二)

寒輕^{シテ}市上山煙碧 日滿^テ樓前江霧黃^{ナリ}

此亦縣前春意動之物景。雲南冬蒸^テ地煖^{ナリ}。故^ニ山市江樓氤氳如^レ
春^ノ也。

(注1) 薛益『分類』(卷二、四時)および顧宸『註解』に「雲安は冬蒸して地
暖なり」と。『註解』は、宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

これもやはり〈県前〉に〈春意〉が〈動く景物。雲南「安」は冬
蒸して土地が温暖である。それゆえ〈山〉側にある〈市〉や〈江〉
に臨む〈樓〉は気がむんむんとして春のようである。

負鹽^{レテ}出井^ニ此谿^ノ女 打鼓^ヲ發船^ヲ何郡^ノ郎

夔州奉節大昌二縣皆有鹽井。其俗以女^ヲ當門戶^ニ、皆販鹽自
給^ス。蜀中鹽井數十百處、散在^ニ諸郡山中^ニ。文獻通考^三云、四

川之鹽、取^ニ之于井^ニ。山谷之民相^{シテ}地^ヲ鑿^レ井^ヲ、深至^ニ六七
丈^ニ、幸^ニ而果^ニ得^ニ鹽泉^ヲ、募工^ヲ以^レ石^ヲ鑿^レ砌^ス、以^ニ牛革^ヲ爲^レ

囊^ト、數十人牽^テ大繩^ヲ以^レ汲^ニ取^ニ之^ヲ。至^{レハ}午則泉脈盡^ク竭^ク、乃
縋^シ人^ヲ于繩^ニ、令^ニ下^ニ以^レ手^ヲ汲^ニ取^ニ之^ヲ。然^レ後引^{レテ}繩^ヲ

上^ル。得水^ヲ入^レ竈^ニ、以^ニ柴茅^ヲ煎煮^ス、乃得^ニ成^ニ鹽^ニ。視^{レハ}他處^ニ
爲^ニ最難^ト云。夫井深^ク事艱^ク如^レ是。乃以^ニ婦女子^ヲ負鹽^ヲ而

出^ス之^ヲ、豈不^ニ尤憫^マ哉。峽中地險^ニ水迅^ク、兩舟相觸、急^ニ
不^レ及^ニ避^ニ、必致^ニ損壞^ヲ。故^ニ下峽^ノ之舟、必擊^テ鼓^ヲ而行^ク。令^ニ

上瀨^ニ船^ヲ避^ニ也。二句言^ニ風土之惡^{キヲ}、後聯所^ニ以^レ感嘆^ス一^ニ也。

(注2) 邵宝『集註』に(卷二十二、時序類)「夔州の奉節・大昌の二県に、塩
井有り。其の俗、女を以て門戸に當て、塩を販つて自給す」と。宇都宮
遷庵の詳説に挙げる。薛益『分類』も同様の注。

(注3) 元・馬端臨『文獻通考』には見あたらないが、『統志治通鑑』卷一四六、
宋紀一四六、淳熙四年(一一七七)の条に、四川制置使胡元質の言とし

て「蜀の塩は之を井に取る。山谷の民、地を相し井を鑿ち、深さ六七
丈に至る、幸ひにして果して塩泉を得れば、工を募つて石を以て鑿砌す。

牛革を以て囊と爲し、數十人大繩を牽きて以て之を汲み取る。子自り
午に至れば則ち泉脈漸く竭く、乃ち人を繩に縋らせ、下して手を以て汲

み取らしめ、之を囊に投ず。然して後に繩を引き上げて上る。水を得て竈に
入れ、柴茅を以て煎煮す、乃ち塩と成すことを得」と。

(注4) 顧宸『註解』に「凡そ峽を下る船、必ず鼓を撃ちて節と爲す。前船の
鼓声を聴くに既に遠くして、後船初めて発す。恐らくは相値うて互いに
触れて必ず損壞を致さんことを」とあり、宇都宮遷庵の増広本にも挙げ
る。

夔州の奉節・大昌の二県にはいずれも塩井がある。その風俗は女を
門戸に當て、皆塩を販つて自給する。蜀中の塩井は数十百箇所、諸
郡の山中に散在している。『文獻通考』に云う、「四川の塩はこれを
井戸に取る。山谷の民は地相を占つて井戸を掘り、深さ六七丈に
至つて、運よく果して塩泉をあてると、職工を募つて石を積んで井
壁にし、牛革を囊にして、数十人が大繩を牽いて汲み上げる。午に
至ると泉脈が尽きてなくなり、そこで人を繩に縋らせ、降ろして手
で汲み取らせ、囊に入れる。それから繩を引いて上げる。水と
いっしょに竈に入れ、柴茅で煎煮すると、やっと塩ができあがる。
他処にくらべると最も難儀であるという」と。そもそも井戸の深く
仕事の難儀なことかかる具合である。それなのに婦女子に塩を背負
せてこれを取り出すのは、どうしてこのほか憫まれずにおれよう

か。峽中は土地は険しく水流は迅く、両舟が相触れること急にして
避けるのに間に合わない、必ず損壞するはめになる。それゆえ下
峽を下る舟は、必ず〈鼓〉を撃つて行き、〈瀨に上る船〉を避けさせ
るのである。二句は風土の悪しきを言う。後聯に感嘆するゆえんで
ある。

新亭舉目風景切 茂陵著書消渴長

晉書諸名士遊宴新亭。周顒嘆曰、風景不殊、舉目有山河之異。因相視流涕。風景謂天氣時景。顒等避亂江東、嘆其風土與洛陽異也。公留雲安、不得還京、正如新亭之悲也。切迫也。言迫于情、不勝感也。消渴即肺病。此用二故事、不妨犯複。司馬相如善文、武帝召以為郎。常有消渴病。免居茂陵、著封禪書。公時抱病、屢比相如、以其為郎、故用之。如病渴汚官位、尤可見也。

（蕭十二使君に贈り奉る」詩、詳註卷二十三）
という句例が見える。

（注5）『晉書』卷六十五、王導伝に「江を過る人士、暇日に至る毎に、相要して新亭に出でて飲宴す。周顒中坐して嘆じて曰く、風景は殊ならざるとも、目を挙ぐれば江河の異なる有りと。皆相視て涕を流す」と。なお、これは『世説新語』言語篇に見える。

（注6）例えば、『字彙』に「切、（中略）割也。刻也。近也。迫也」と。

（注7）消渴そのものは糖尿病のこと。ちなみに、近人盧國琛『杜甫詩醇』（浙江大学出版社、二〇〇六年）に「此処杜甫用來比喻自己因肺病滯留在雲安」（ここで杜甫はそれによって自らが肺病に因って雲安に滯留していることを喩える）という。

（注8）ちなみに、杜甫が司馬相如（長卿）に言及した例としては、「玄を草するは吾れ豈に敢へてせんや、賦或いは相如に似たり」（「高使君の相贈るに酬ゆ」詩、詳註卷九）というのが最初であるが、その病と関連づけて自らを比したのとして、

- ・長卿多病久しく、子夏索居頻りなり
- （「草左相に上る二十韻」詩、詳註卷三）
- ・我 長卿の病多く、日夕 朝廷を思ふ
- （「元使君の春陵行に同ず」詩、詳註卷十九）

- ・長卿消渴再びし、公幹沈綿屢しばなり
- （「高司直の封聞州を尋ぬるを送る」詩、詳註卷二十一）
- ・長卿久しく渴を病み、武帝元と同時
- （「魏六丈佑少府の交広に之くを送り奉る」詩、詳註卷二十三）
- ・達せず長卿の病、從來原憲貧なり

『晉書』に「諸名士が新亭に遊宴した。周顒が嘆じて曰く、風や光は違っていないのに、目を挙げれば山河は異なっていると。そこで互いに顔を見合わせてさめざめと涙を流した」と。《風景》は、天氣時景のこと。顒等は乱を江東に避け、その風土が洛陽と異っているのを嘆じたのである。公は雲安に留まって京に還ることができずにおり、まさしく《新亭》の悲しみのごとくであった。《切》は、迫である。情に迫られて感にたえないことを言うのである。《消渴》は、肺病にはかならない。ここでは故事を用いており、（前首に肺病と言うのと）重複を犯すのを妨げない。司馬相如は文を善くし、武帝は召して郎（侍従）とした。常に《消渴》の病あり、官を免ぜられ（茂陵）に居り、「封禪書」を著した。公は當時病を抱えており、しばしば相如に比し、その郎たることによって、これを用いた。渴を病み官位を汚すような例に、とりわけ見てとれる。

春花不愁不爛熳 楚客惟聽 權相將

※聽：マ、ニス 相將：ヒキツレユク
不愁 春花之不爛熳 言不待春來也。夔州ハ楚地、故稱楚客。聽ハ從也。將ハ率也。此言江上春意已動、舟行無復苦寒之憂、不待二年芳爛漫之候、便可以下峽而去。吾不願茲久シク爲客、惟任舟楫與我相將爾。蓋厭雲南之甚、自慰之辭也。慢當作漫。字書從無慢字。後世詞家多從火傍、沿襲之誤爾。

（注9）《權》字、錢注および輯註は《棹》に作る。

（注10）邵宝「集註」に「聽は從なり」と。宇都宮遼庵の詳説に挙げる。また釈大典「詩語解」卷上に、從・聽の条に「字彙・聽・從也」とあり、句例に「楚客唯聽權相將」を挙げて「任・信と同用」という。

（注11）詠注稿五、025「堂成」詩の詳解に既出。

（注12）年芳は、春花。春の華やかさ。六朝梁の沈約「三月三日率爾として篇

を成す」詩（『文選』卷三十）に「麗日元巳に属し、年芳具に斯に在り」と。

〔注13〕顧宸『註解』に「此れ又た自ら慰するの詞なり」と。宇都宮遯庵の両著に挙げる。

〔注14〕『夜航詩話』卷四に「模糊を模に作り、爛漫を漫に作る、偏く字書を考ふるに、従て此の字無し。蓋し糊は米に従ひ、爛は火に従ふに因り、模漫の左文従つて訛するのみ」と。

なお、爛漫の語義についても、同書卷六に「詩家毎に爛漫の字を用ふ。而も字書に明解無し。蓋し物の夥盛の貌、唯だ花の歴乱、霞の灼爍を称するのみならず、凡そ事の淋漓酣足の状、皆之を爛漫と謂ふ。弭地暨累と訳す。又た婆娑紛綸の貌と称す。地羅婆累と訳す」云々と指摘する。

《春花》の《爛漫たらざる》を《愁へず》は、春が来るのを待たないの言うのである。夔州は楚の地であるから、《楚客》と称する。《聴》は、従である。《将》は、率である。ここの意味は、《江》辺の《春意》がすでに《動》きだし、舟行にはもはや寒さに苦しむ心配がない。年芳爛漫の候を待つに及ばず、すぐさま峽を下ってゆくことができる。自分はここに久しく客たることを願わない、ただ舟楫の我と《相将る》に任せるのだ、というのである。けだし雲南「安」を厭うの甚しき、自らを慰める辞である。《漫》は、当然《漫》に作るべきだ。字書には従来《漫》字がない。後世の詞家は多く火へんに従うが、沿襲の誤まりだ。

081 (其三)

即看燕子入山扉

豈有黄鹂歴翠微

短短桃花臨水岸

輕輕柳絮點人衣

四句一氣讀下。緊承「前春花」句、而逆「道」春事、爛漫、想像之辭也。即看、言不遠也。豈有、者、黃鳥盡く出幽谷而去、無復歴翠微者也。爾雅「山未及上曰翠微」。疏「云山未及三頂上、在旁陂陀之處、名翠微」。一說「山氣青縹色、

故曰「翠微」。短短、樹低、近水貌。輕輕、柳絮飄貌。顧註云、當燕未來巢、鶯未出谷之臘候、而預擬其即入山扉、無復歴翠微。此義原在下句、所謂春來、所謂他日也。蓋望「春至之速」、逆「道」其事爾。

〔注1〕顧宸『註解』に「詩は十二月一日に作る。而して《燕子》（黃鸝）《桃花》（柳絮）の句有り。蓋し其の事を逆へ道ふ」と。

〔注2〕顧宸『註解』に「即看は、遠からざるを言ふなり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』の字解（卷十四）には、「即看」について「もし之を看るとしても意」とする。また「豈有」について「此の二字は黃鸝五字のみならず、短短・輕輕の二句をも管す。よほど変体の句法とみるべし」という。

〔注3〕「爾雅」釈山に「未だ上るに及ばざるを翠微と曰ふ」とあり、邢昺の疏に「未だ頂上に及ばざると謂ふは、旁陂陀の処に在るを、翠微と名づく。一説に山氣青縹の色、故に翠微と曰ふ」と。

〔注4〕顧宸『註解』に「燕未だ巢に來たらず鶯未だ谷を出ざるの臘候に当たつて、而して春意已に動く。故に預め其の即ち山扉に入つて、即ち翠微を歴することを擬するなり。十二月一日詩を作つて燕鶯桃柳有り。此の義原と下句に在り、所謂春來、所謂他日なり。蓋し春至るの速かなるを望んで、其の事を逆へ道ふ爾」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

四句は一氣に読み下す。びたつと前首の《春花》の句を承けて春事の《爛漫》を予測して言う。想像の辞である。《即ち看ん》は、程遠くないことを言うのである。《豈に有らんや》とは、黃鳥がのこらず幽谷を出て去り、もはや《翠微を歴る》ものがないことである。『爾雅』に「山未だ上るに及ばざるを翠微という」と。疏に云う、「山未だ頂上に及ばず、旁陂陀の処に在るを翠微と名づく。一説に山氣青縹の色、故に翠微という」と。《短短》は、樹低く水に近いさま。《輕輕》は、《柳絮》の飄るさま。顧註に云う、「燕がまだ巢作りに來ず、鶯がまだ谷を出ない臘の時候にあたつて、前もつてその《即ち》（山扉に入）り、もはや《翠微を歴》ないのを推し量る。この義はもと

下句に在り、いわゆる〈春来〉、いわゆる〈他日〉である。けだし春の至るのが速かならんことを望んで、その事を予測して言うのだ。春来^ハ準^{スル}擬^ス開^{ント}懷^ス久^シ 老去親知見^レ面稀^{ナリ}

春来^ハ緊^{シテ}承^テ前^ノ四句^ヲ、待^テ如^レ是^ノ爛漫^ヲ、擬^ス歡娛^ノ遣^{ント}興^ヲ、而老境無聊、親知皆各天、即鶯燕花柳亦奚^モ以爲^シ哉。準擬親知、虛實對法。^(注5)邵註^(注6)謂^フ之^ヲ假對^ニ、誤^リ矣。假對者、借聲對也。

(注5) 訳注稿(六)、040「野を望む」詩の頸聯「唯だ遲暮を將つて多病に供し、未だ涓埃も聖朝に答ふる有らず」について、詳解に「(遲暮)(涓埃)は虚実對、亦た輕重對と曰ふ」とあり、その(注18)参照。

(注6) 邵傳『集解』に「(準擬)(親知)は假對なり。之を讀みて覺らず、虚実同様同じからず。此の老甚だ古怪」と。

假對については、三浦梅園『詩鵜』巻五に「酒債尋常行處^ニ在^リ、人生七十古來稀^{ナリ}。八尺^ヲ日^ヲ尋^ト、倍^{スル}日^ヲ尋^ト云義アルニヨリ、義異レトモ、字^ヲ假^テ對^ラナセリ。住山今十載、明日又遷居。遷二千ノ声アリ、假^テ黃^ニ對^ス。眼暗^{シテ}常^ニ訝^リ雙^ニ魚^ノ影^ヲ、耳熱^{シテ}何^ノ辭^ヲ數^ニ鴈^ノ頻^ニ、コ、ハ數盃ト云事ナレトモ、爵雀ト通用スルヲ以テ、雙魚ニ對ス。是ヲ借韻對トモ云」と。

〈住山〉云々は、作者未詳。〈捲簾〉云々は、中唐・賈島「武功の姚主簿に寄す」詩(『長江集』巻四)の十五、十六句。〈眼暗〉云々は、中唐・韓愈「酒中留めて襄陽の李相公に上る」詩(『韓昌黎集』巻十)の頷聯。これらの句例は、『詩人玉屑』巻七、借對の条に挙げる。但し、賈島詩の〈捲簾〉は、玉屑は〈卷簾〉に作り、集も同じ。〈閉戸〉は、集では〈鎖印〉に作る。また韓愈詩の〈眼暗常訝雙魚影〉は、玉屑は〈眼穿長訝雙魚斷〉に作り、集も同じ。

東陽も『夜航詩話』巻四において「假對、即ち借聲對は音を以て對を取るなり、然れども較著なる者に非ずんば為さざるなり」として、唐宋の句例を挙げる。なお、『夜航詩話』では、前出075「諸將五首」其二の頸聯「胡來たり覺えず潼関の隘きを、龍起り猶ほ聞く晋水の清きを」について、これを借對の例に挙げ、「胡音狐に通ず」という。

〈春来〉は、びたとつと前の四句を承け、このように〈爛漫〉たるを

待つて、歎び娛しんで興を遣らうとするが、されど老境無聊で、〈親知〉(親戚知友)はいずれも別の空の下、よし〈鶯〉(燕)や〈花〉(柳)であつても、やはりどうしようか、どうにもならない。〈準擬〉と〈親知〉とは、虚実對の句法。邵註に假對というのは、誤つてゐる。假對とは、借聲對のことである。

他日一杯難強進^ニ 重^テ嗟^{カシ}筋力故山違^フ

他日春方^ニ至^テ、欲^ニ一杯開^{ント}懷^ヲ、然^{トモ}無^ニ人^ノ共^ニ、難^ニ強^テ獨醉^ニ耳。乃反^テ徒^ニ感傷^シ、重^テ嗟^ニ其負^ツ春^ノ矣。蓋強健行樂、玩^ニ故山之春^ヲ、其乘^{レシ}コト興^ニ何如哉。今筋力衰罷^{シテ}、而沈^ニ滯^ハ殊方^ニ、雖^レ逢^ニ風景^ニ、無^ニ因^ニ歡娛^ニ、乃欲^ニ待^テ春^ヲ開^{ント}懷^ヲ、殊^ニ不^レ知其重^テ嗟^ニ也。初想^ニ像^ニ春事^ヲ、準^ニ擬^{シテ}賞豫^ヲ、既^ニ而^ニ知^ニ其待^{レテ}春^ヲ無^レ益^ニ、自笑^ニ吾癡^ヲ也。三首中差爲^ニ此善^ニ於彼^ニ、聲律亦始^ニ整^フ矣。

〈他日〉、〈春〉まさに至れば、〈一杯〉やつて〈懷を開〉こうと思ふのだが、されど共にする人がなくては、〈強〉いて独り酔い〈難〉いのだ。それではかえつていたずらに感傷し、〈重〉ねてその〈春〉に負くのを〈嗟〉くことになるだろう。けだし強健で行樂し、〈故山〉の春を賞玩すれば、その興に乗ぜんこといかばかりであろうか。今では〈筋力〉が衰えやみ、異域に沈滞しているからは、よき風景に逢つても、歎び娛しむのによしなく、かえつて〈春〉を待つて〈懷を開〉こうとして、その〈重ねて嗟く〉はめにならうとはちつとも知らなんだ。初め〈春〉の行樂を想像して、それを愛でる心づもりを〈準擬〉したが、やがて〈春〉を待つことの無益なるを知り、自ら己が痴を笑うのである。三首の中ではややこれを他の二首よりましだとするが、声律もやつと整っている。

082 白帝城ノ最高樓

白帝城^(注1)ハ在^リ夔州府治^ノ東五里^ニ。北緣^ニ馬嶺^ニ高^サ一千丈。西南臨^ニ大

江^{注2}、即瞿唐峡口、江水湍騰澎湃、楚蜀咽喉、要害無雙。漢ノ公孫述據^{注3}蜀有^{注4}白龍之瑞、因^{注5}自號^{注6}白帝^{注7}、築城居焉。大曆元年春、公自^{注8}雲南移^{注9}居^{注10}夔府^{注11}、因^{注12}登^{注13}于此^{注14}也。

〔注1〕「白帝城に上る」詩の輯註（卷十二）に「全蜀總志」の「白帝城は夔州府治の東五里に在り。下は即ち西陵峡口、大江湍騰澎湃たり、信に楚蜀の咽喉」というのを引く。輯註は、字都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔注2〕徐增「而庵說唐詩」（卷十七）の「秋興八首」其「一」に「白帝城は今夔州城東に在り。公孫述が蜀に拠りしとき、殿前の井中嘗て白龍の出づるを見、因つて白帝と僭稱す」と。

《白帝城》は、夔州府治の東五里にある。北は馬嶺に縁り高さ一千丈。西南は大江に臨むが、とりもなおさず瞿唐峡の出入口で、江水が激しく波立ち打ち寄せ、楚蜀の咽喉で、要害として無双の地である。漢の公孫述は蜀に割拠して白龍の瑞兆があつたので、そこで自ら白帝と号し、城を築いて居住した。大暦元年（七六六）春、公は雲南〔安〕より居を夔府に移しており、それでここに登つたのである。

城尖^{注1}徑仄^{注2}旌旆愁^{注3} 獨立^{注4}縹緲^{注5}之飛樓

城尖ハ謂^{注6}據^{注7}二絶頂^{注8}。山峭^{注9}而頂窄^{注10}、故曰^{注11}尖^{注12}。仄^{注13}狹隘也。愁^{注14}杳渺之意。與^{注15}山腰官閣迴添^{注16}愁^{注17}同。縹緲^{注18}ハ高遠之貌。飛樓^{注19}謂^{注20}其高危若^{注21}飛舉^{注22}也。起句言^{注23}欲^{注24}登^{注25}而仰望之形勢^{注26}。次句乃至^{注27}絶頂^{注28}、飛樓縹緲^{注29}於空際^{注30}、而獨立^{注31}于其上^{注32}、飄飄如^{注33}危也。

此句先見^{注34}遠望之景盡^{注35}ク在^{注36}目中^{注37}矣。胡燮亭云、縹緲^{注38}二字、申^{注39}言^{注40}尖仄^{注41}如^{注42}畫^{注43}、加^{注44}一飛^{注45}字^{注46}、則縹緲^{注47}之意似^{注48}欲^{注49}揺^{注50}動^{注51}空^{注52}中^{注53}矣。二聯及起句皆有^{注54}力量^{注55}、音節太急、所以^{注56}此句可^{注57}鬆^{注58}、是詩家操縱之法、第七亦句法相應。

〔注3〕「積大典『杜律發揮』に「按スルニ白帝山峭峻^{注1}頂狹^{注2}、而最高樓在其上^{注3}、故曰城尖^{注4}。注解^{注5}謂^{注6}城之一隅^{注7}、非也」と。顧宸「註解」に「城尖は、城の一隅なり」と。註解は字都宮遷庵の両著に挙げる。

〔注4〕顧宸「註解」に「仄は、狹隘なり」と。字都宮遷庵の両著にも挙げる。

〔注5〕訳注稿(七)、048「涪城県香積寺の官閣」詩の第二句。その詳解に「愁は杳渺の意。遠く望む気色を謂ふ。公自ら愁ふるに非ざるなり」と。

〔注6〕顧宸「註解」に「城尖徑仄、更に飛樓有り、空際に縹緲たり。故に最高と曰ふ。公独り其の上に立ち、一望、尽く目中に在り矣」と。字都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔注7〕「唐詩貫珠」（卷三十八、登眺）に「第二、縹緲の二字、尖仄を申言して画の如し。一飛字を加ふれば、則ち縹緲の意、空中に揺動せんと欲するに似たり」と。

〔注8〕「積大典『杜律發揮』に「起句及三四句音節急^{注1}、故第二句寛緩^{注2}挿^{注3}来^{注4}」と。

〔注9〕操縱の法とは、変化に富んだ作詩法。例えば、南宋・胡仔「茗溪漁隱叢話前集」卷四十一、東坡四に「石林詩話」の「詩篇に當に操縱有るべし。一律を拘用す可からず」というのを引く。

《城尖》は、絶頂に拠ること。山は峭^{注1}しくて頂は窄^{注2}く、されば《尖》という。《仄》は、狹隘である。《愁》は、杳渺の意。「山腰官閣迴^{注3}かにして添^{注4}ます愁^{注5}ふ」と同じ。《縹緲》は、高遠のさま。《飛樓》は、その高く危ういのが飛び挙げらばかりなることである。起句は、登ろうとして仰ぎ望んだ形勢を言う。次句は、やつと絶頂に至り、《飛樓》が空際に《縹緲》として、その上にただ《独》り《立》つと、飄飄として危うきがごときである。この句はまず遠望の景がごとごとく眼中にあるのをあらわしている。胡燮亭が云う、「縹緲」の二字は、《尖》《仄》を引き伸ばして言い絵に描いたようである。《飛》の一字を加えると、《縹緲》の意が空中に揺動するかのようだ」と。二聯および起句は皆力量あり、音節はとても急で、それゆえこの句は緩くせねばならない。これは詩家の操縱の法で、第七句もやはり句法相應じている。

峡折雲霾^{注1}龍虎睡^{注2} 江清^{注3}日抱^{注4}鼉鼉遊^{注5}

折^{注6}ハ開也。霾^{注7}ハ雨^{注8}土^{注9}也。日抱^{注10}ハ言^{注11}下^{注12}先^{注13}在^{注14}水下^{注15}、激灑閃爍^{注16}也。

二句近望^{注17}所^{注18}見、即瞿唐峡^{注19}景勢、直^{注20}在^{注21}目下^{注22}。上句言^{注23}至幽^{注24}、

下句言「至清」ヲ、詳ニ推ニ詩意ヲ、此日登臨之初、屬朝霧暗陰、故「自一至三」ニ、皆説渺茫之景。既而雲散、日明ニシテ、江波始「灩灩」リ、所「以四」句乃曰「江清」日抱。龍虎睡ハ驚ニ怪、峽石突兀之狀ヲ、龍遊ハ想ニ像、江潭湛澹之影。蓋峽折、雲龍之間、有物蟠踞、疑ニ龍虎之睡臥ニスルヲト。江清日抱之際、隨レ光ニ悠溶盪漾、想ニ龍虎之出遊ニ也。丹鉛録ニ云、此乃登高臨深ニ、形容疑似之狀耳。舊註ニ謂雲氣陰黯、龍虎ノ所レ伏ス、日光圍抱、龍虎出曝。眞ニ以爲四物ト矣。即以杜證杜、如「江光隱見、龍虎窟石勢參差、鳥鵲橋、同一句法同一解也。蘇子赤壁賦ニ云、踞「虬」登「虬」、攀「栖」鵲危巢、俯「馮夷」之幽宮、是也。此意豈眞ニ有ニ鳥鵲龍虎龍虬龍虎約ニ哉。

(注10) 〈折〉は、〈拆〉の訛字。

(注11) 宇都宮遷庵の両著に「拆」字彙、耻格切、開なり」と。

(注12) 訳注稿(一)、002「鄭駙馬潜曜洞中に宴す」詩の詳解に「龍、音埋。風、土を雨らすを龍と曰ふ」と。

(注13) 顧宸「註解」に「次聯は近望の見る所」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

(注14) 顧宸「註解」に「峽折け雲龍つて其の突兀踞の状は、則ち疑うて以て龍虎の睡ると為す」と。宇都宮遷庵の両著にも挙げる。

(注15) 顧宸「註解」に(注13)に挙げた箇所に続けて「江清く日抱きて其の奔湧閃爍の状は、則ち疑うて以て龍虎の遊ぶと為す。此れ乃ち高きに登り深きに臨んで、形容疑似、眞に以て四物と為すは誤りなり矣」と。宇都宮遷庵の両著にも挙げる。但し、増広本は誤って「龍虎之遊」以下(眞以為)までの十六字を脱す。龍虎は、大スッポンとワニ。

(注16) 明・楊慎「丹鉛總錄」卷二十一、詩話類、日抱龍虎の条に「韓石溪延延、余に語つて曰く、杜子美『白帝最高樓に登る』詩に曰く、〈峽折け雲龍つて龍虎睡し、江清く日抱きて龍虎遊ぶ〉と。此れ乃ち高きに登つて深きに臨み、疑似の状を形容する耳。雲龍峽、山木蟠拏、龍虎の臥するに似たる有り、日抱清江、灘石波盪、龍虎の出でて曝すが若くなる有りと。余因つて旧註の非を悟る。其れ云ふ、雲氣陰黯、龍虎の伏する所。

日光開抱、龍虎出でて曝すと。眞に以て四物と為す矣。即ち杜を以て杜を證するに、〈江光隱映す龍虎窟、石勢參差たり鳥鵲橋〉の如き、同一の句法、同一の解なり。蘇子赤壁賦に云ふ、〈虎豹に踞し虬龍に登り、栖鵲の危巢に攀し、馮夷の幽宮に俯す〉、是れなり。此の意豈に眞に鳥鵲龍虎龍虬龍虎約有らんや」と。

韓石溪は、韓士英(字は廷延、号は石溪)のこと。正徳九年(一五一四)の進士。〈江光隱映す龍虎窟、石勢參差たり鳥鵲橋〉は、訳注稿(一)、053「玉台觀」詩の頸聯。蘇子は、北宋の蘇軾。ここに引くのは「後赤壁賦」中の句。栖鵲はハヤブサ。馮夷は水神。『丹鉛總錄』は、度会末茂「杜詩評義」にも引くが、〈余因悟〉から〈龍虎出曝〉までの二十五字を脱し、〈虬〉字を〈虹〉に誤る。なお、『升庵集』卷五十八の「日抱龍虎」の条にも同様の記述が見える。

〈拆〉は、開である。〈龍〉は、土を雨ふらすことである。〈日抱く〉は、まず水下に在つて、激澗閃爍(きらきらちかちか)するのを言うのである。二句は近くを望んで見えたもの、とりもなおさず瞿唐峽の形勢で、直ちに眼下にある。上句はこの上なく幽邃なることを言い、下句はこの上なく清冽なることを言う。詳らかに詩意を推すに、この日、登臨の初めは、おりしも朝霧が暗く立ち籠めており、それゆえ第一句から第三句まで、いずれも渺茫の景を説く。やがて雲が散じ日が明るくなると、江波はようやく灩灩(きらきら)とし、それゆえ第四句でやっと〈江清く日抱く〉という。〈龍虎睡る〉は、峽石の突兀としたありさまに驚き怪しみ、〈龍虎遊ぶ〉は、深く澄んだ江潭の影を想像する。けれど〈峽折け雲龍る〉の間に、何やら蟠拏踞(とぐろをまいてうずくまる)しており、〈龍虎〉の眠り臥するかと疑い、〈江清く日抱く〉の際に、光に随つて悠溶盪漾(ゆらゆら)もそもそとし、〈龍虎〉の出でて〈遊ぶ〉のを想像するのである。『丹鉛録』に云う、「これこそは高きに登り深きに臨んで、よく似たありさまを形容しただけだ。旧註に雲氣陰黯たるは、龍虎の伏するところ、日光に包まれると、龍虎が出でて甲羅干しするのだとみ

なして、ほんとうに四つの物だとしている。そこでさつそく杜甫の別の詩で杜甫のこの詩を證するに、〈江光隱見す鼉鼉の窟、石勢参差たり烏鵲の橋〉のような例は、同一の句法で同一の解である。蘇子の赤壁賦に『虎豹に踞し虬龍に登り、栖鵲の危巢に攀し、馮夷の幽宮を俯す』というのが、そうである。この意にどうしてほんとうに烏鵲・鼉鼉・虬龍・虎豹があるのか」と。

扶桑／西枝對斷石 弱水東影隨長流

※西枝：アサヒカゲ 東影：ユウヒカゲ

此聯遠望所見、上句言極東、下句言極西。扶桑、樹名、在日出之地、見淮南子及十洲記。對言照射也。斷石、謂石壁中斷。即上所謂峽折。公移居夔州詩亦云、禹功饒斷石。世傳巴峽禹王所疏鑿云。蓋峽中數十里、兩崖絕壁中貫一江、故曰折、曰斷。峽日向正東、故城上所望、東海日出之光、覺扶桑西邊枝影直映峽日之絕壁也。弱水、非禹貢所謂既西、史記稱在西海者。集仙傳西王母所居、崑崙之圃、弱水九重、非輞車羽輪、不可到。此蓋用之。長流、即上所謂江清者。隨斜陽之影、從上流映來。激灑連天、無際、遙想其自崑崙之弱水而東。注上。諸註率不知斷石爲峽長流爲江、故皆憤憤矣。是聯直承第四句、寫快晴萬里、眼界曠莫、極日之所出入。蓋本諸淮南子日登於扶桑、是謂咄明、史記崑崙日月所相避隱爲光明也。此極言白帝城樓之高。西眺東瞻、舉天下而盡在一望中。下文所以發中憂天下之長嘆也。扶桑弱水、原是渺茫之談。自與第二句通氣。對一作封。諸註費解。今從輯註本正之。

(注17) 顧宸「註解」に「三聯は遠望の見る所」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注18) 顧宸「註解」に「扶桑は極東、日出づるの地に在り」と。宇都宮遯庵

の両著にも挙げる。

(注19) 『唐詩貫珠』に「淮南子に、日は暘谷に出、咸池に浴し、扶桑を扶す、是れを晨明と曰ふ。扶桑に登り、爰に始めて將に行かんとす、是れを咄明と謂ふ」と。『淮南子』は天文訓に見える。但し、〈扶〉は〔私〕に作る。高誘の注に「私は過、一説に至なり」と。

(注20) 『唐詩貫珠』に「十洲記に、扶桑は碧海中に在り。樹長さ数千丈、大いさ二千圍。両同根偶生し、相依倚す。故に扶桑と名づく。仙人其の樞を食へば、体、金光色と作り、空中に飛翔す。其の樹九千年に一たび実を生じ、味絶だ甘く香美し」と。『十洲記』は、前漢・東方朔撰とされる地理書。『藝文類聚』卷八八、木部上、木の条および『太平御覽』卷九五三、木部、桑の条に引く。

(注21) 「居を夔州に移さんとして作る」詩（詳註卷十五）に、次のように見える。

伏枕雲安縣 遷居白帝城 枕に伏す雲安県、居を遷す白帝城
春知催柳別 江與放船清 春は知る柳を催して別れしむるを、江は放船の与に清し

農事聞人説 山光見鳥情 農事人の説くを聞く、山光鳥情を見る
禹功饒斷石 且就土微平 禹功斷石饒し、且く就かん土の微平なるに

(注22) 『尚書』禹貢に「弱水既に西す」と。

(注23) 『唐詩貫珠』に「史記に弱水は西海に在り、一羽を負ふ能はず」とあるのに基づくが、『史記』では卷一二三、大宛列伝に「条枝は安息の西数千里に在り、西海に臨む。（中略）安息の長老伝聞するく条枝に弱水、西王母有り、而して未だ嘗て見ず」という。

(注24) 『唐詩貫珠』に「集仙伝に云ふ、西王母居る所は、崑崙の圃、閭風の苑。其の山下に、弱水九重、洪濤万丈あり。輞車羽輪に非ざれば、到る可からず」と。胡燮亭のいう『集仙伝』は、『集仙録』のことであろう。『太平御覽』卷六六一、道部三、真人下に引く『集仙録』には、西王母について、「居る所の宮闕は春山の崑崙の圃、閭風の苑に在り。城有り千里樓十二、輞車羽輪に非ざれば、到る可からず」と。

(注25) (注19) 参照。

(注26) 『史記』大宛列伝に「禹本紀に言ふ、河は崑崙より出づ。崑崙其の高さ

二千五百餘里。日月の相避隠して光明を為す所なり」と。
 (注27) 輯註は〈対〉に作り、「一に封に作る」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

この聯は遠くを望んで目に入つたもの。上句は極東を言い、下句は極西を言う。〈扶桑〉は、樹の名。日出づるの地に在り、『淮南子』および『十洲記』に見える。〈対〉は、照射を言うのである。〈断石〉は、石壁が途中で断絶すること。とりもなおさず上にいわゆる〈峽拆く〉である。公の「居を夔州に移す」詩にもやはり云う、「禹功断石饒」と。世の言い伝えでは巴峽は禹王の疏鑿したものとのこと。けだし峽中数十里、両崖の絶壁の間に一江を貫く、それゆえ〈拆〉といひ〈断〉という。峽日は真東に向う、それゆえ城上望むところの東海日出の光や〈扶桑〉〈西〉辺の〈枝〉影が、直ちに峽日の絶壁に映ずるような気がするのである。〈弱水〉は、「禹貢」のいわゆる「既に西す」とか『史記』に「西海に在り」と称するものではない。『集仙伝』に「西王母の住まいは崑崙の圃、弱水九重にあり、飊車羽輪でなければ、到ることができない」と。これはけだしこれを用いる。〈長流〉は、とりもなおさず上のいわゆる〈江清〉なるもの。斜陽の影に随つて、上流より映じ来たる。激澗（きらきら）と天に連なつて際限なく、その崑崙の〈弱水〉より東に注ぐのを遙かに想像するのである。諸註はおおむね〈断石〉が峽で〈長流〉が江であるのが分からず、それゆえどれもはっきりとしない。この聯は直ちに第四句を承けて万里にわたつてすつきりと晴れ、眼界は広漠として、日の出入するところに極まるのを写す。けだしこれを『淮南子』に「日、扶桑に登る、是れを朏明と謂ふ」、『史記』に「崑崙は日月の相避隠して光明を為す所なり」とあるのに本づく。これは極めて〈白帝城楼〉の高きを言う。西を眺めても東を瞻ても、天下を挙げてことごとく一望の中にある。下文に天下を憂うる長嘆を発するゆえんである。〈扶桑〉〈弱水〉は、元来とりとめもない話で、おのず

と第二句と気脈を通ずる。〈對〉は、一に〈封〉に作る。諸註は解を費す。今、輯註本に従つてこれを正す。

杖藜^{（注28）}嘆世^{（注29）}者誰^{（注30）}泣血^{（注31）}迸^{（注32）}空^{（注33）}回^{（注34）}白頭^{（注35）}

嘆世^{（注28）}憂^{（注29）}天下^{（注30）}也。迸^{（注31）}空^{（注32）}以^{（注33）}憑^{（注34）}高^{（注35）}而泣^{（注36）}。淚^{（注37）}向^{（注38）}空^{（注39）}迸^{（注40）}散^{（注41）}也。

白帝城樓之望^{（注42）}、固^{（注43）}天下^{（注44）}大觀^{（注45）}。杖策^{（注46）}陵險^{（注47）}、可^{（注48）}以^{（注49）}窮^{（注50）}眼界^{（注51）}矣。

公徙倚^{（注52）}廻望^{（注53）}之際、乃亦感^{（注54）}傷^{（注55）}時世^{（注56）}。對^{（注57）}此^{（注58）}茫茫^{（注59）}、百端^{（注60）}交集^{（注61）}。

不知^{（注62）}天下之亂^{（注63）}、何^{（注64）}時^{（注65）}得^{（注66）}見^{（注67）}太平^{（注68）}、眞^{（注69）}可^{（注70）}痛哭^{（注71）}流涕^{（注72）}。爲^{（注73）}之泣血^{（注74）}迸^{（注75）}空^{（注76）}、重^{（注77）}廻^{（注78）}白頭^{（注79）}悵望^{（注80）}、殆^{（注81）}使^{（注82）}肝腸^{（注83）}斷^{（注84）}絶^{（注85）}。然^{（注86）}抱^{（注87）}天下之憂^{（注88）}、豈敢^{（注89）}匹夫^{（注90）}所關^{（注91）}、何^{（注92）}爾^{（注93）}獨悲^{（注94）}之切^{（注95）}。故^{（注96）}自怪^{（注97）}誰^{（注98）}子^{（注99）}。乃^{（注100）}眇眇^{（注101）}杖藜^{（注102）}、一^{（注103）}白頭翁^{（注104）}、非^{（注105）}狂^{（注106）}則愚^{（注107）}耳。上六句奇崛^{（注108）}古怪^{（注109）}、結句決^{（注110）}難^{（注111）}平淺^{（注112）}。傷^{（注113）}世^{（注114）}瀝^{（注115）}血^{（注116）}之慘^{（注117）}、殆^{（注118）}欲^{（注119）}感^{（注120）}動^{（注121）}天地^{（注122）}、收得^{（注123）}力量^{（注124）}相稱^{（注125）}。自嘆^{（注126）}反^{（注127）}問^{（注128）}誰^{（注129）}子^{（注130）}、竊^{（注131）}窺^{（注132）}恍惚、亦與^{（注133）}全體^{（注134）}稱^{（注135）}矣。曰杖藜^{（注136）}曰白頭^{（注137）}、點^{（注138）}得^{（注139）}蕭索^{（注140）}、眞^{（注141）}大海^{（注142）}一粟^{（注143）}矣。此詩眞^{（注144）}作^{（注145）}驚^{（注146）}人^{（注147）}語^{（注148）}、是緣^{（注149）}憂^{（注150）}世^{（注151）}之心^{（注152）}發^{（注153）}之^{（注154）}、以自消^{（注155）}其壘塊^{（注156）}耳。

(注28) 邵傳『集解』に「固に天下の奇觀。策を杖き登臨して以て目を舒べ懷を遣る可し矣」と。

(注29) 徙倚は、低徊するさま。ゆきつもどりつする。双声語。例えば、『楚辭』遠遊に「歩して徙倚として遙かに思ひ、悵として惆悵として懷に乖く」と。

(注30) 『世說新語』言語篇に「衛洗馬（玠）初めて江を渡らんと欲し、形神憔悴。左右に語りて云ふ、此の茫茫たるを見れば、覺えず百端交^{（注31）}も集まる。苟も未だ有情を免れざれば、亦復た誰か能く此れを遣らんと」と。

(注31) 杖藜について、詳解では注を施していないが、松本肇「杜甫『杖藜』考」（『筑波中国文化論叢』5、一九八五年）には、宋・趙次公の注に拠つてこの語が「莊子」讓王篇に見える原意の故事に基づくとし、慷慨の感情と結びついた表現であると説く。

(注32) 『唐詩貫珠』に「上六句は離奇古怪、商彝周鼎の如し」と。離奇は、常ならず珍奇であること。

〔注33〕『唐詩貫珠』に〔注31〕に挙げた箇所に続けて「結句は決して平浅なり難し」と。

〔注34〕北宋・蘇軾の「前赤壁の賦」に「渺たる滄海の一粟」とあり、『諸儒箋解古文真宝後集』（巻一）に引く元の張肇『古文句解』に「渺然甚だ小にして、大海の一粟の如き耳」と。

〔注35〕詳註（巻十五）に引く明・王嗣夷「杜臆」に「此の詩真に人を驚かす語、総て是れ世を憂ふるの心に縁つて之を発す、以て自ら其の墨塊を消す」と。訳注稿(七)、042「江上水の海勢の如きに値ひ聊か短述す」詩に「人と為り性僻にして佳句に耽り、語人を驚かざれば死すとも休まざりし」と。なお、この一節は『唐宋詩醇』（巻十七）にも挙げる。

〈世を嘆く〉は、天下を憂えるのである。〈空に迷入〉は、高いところによって〈泣く〉ことから、涙が〈空〉に〈迷入〉り散るのである。〈白帝城〉の〈楼〉からの眺望は、もとより天下の大観。策を〈杖〉ついで險を陵ぎ、眼界を窮めることができた。公はゆきつもどりつ廻望する際、やはり時世に感傷し、この茫茫たる景色に対して、くさぐさの感慨がこみあげてくる。いったい天下の乱れは、いつになったら太平を見ることができなのか、ほんに痛哭流涕すべきことだ。そのため〈泣血〉が〈空に迷入〉り、重ねて〈白頭〉を廻らして悵望し、ほとんど肝腸を断ち切らんばかりである。されど天下の憂を抱くことは、いったい積極的に匹夫の関わるところであらうか。それなのにどうしてかくも〈独り悲しむことの切実なのか。それゆえ自ら怪んで「誰が子」という。なんと眇眇たる〈杖藜〉の一〈白頭〉翁（にすぎぬ身）は、狂したのでなければ愚なるのみだ。上六句が奇崛古怪であるから、結句は決して平易浅直なりがたい。〈世〉を傷み〈血〉を瀝らす惨たるありさまは、ほとんど天地を感動させんばかりで、力量が相称った収束のしかただ。自ら嘆じて反つて「誰が子」と問うのは、ほんやりとして定かならず、やはり全体とつりあっている。〈杖藜〉といい〈白頭〉という、点綴して蕭索としてお

り、ほんに大海の一粟だ。この詩はほんに人を驚かす語をなしているが、これは世を憂える心ばえから発しており、それで自らその胸中のわだかまりを消すのだ。

* * *

前稿補訂

〔杜律詳解〕訳注稿(一)「文化と情報」第三号

20頁上段19行目 延享三年「一七四六」→延享元年「一七四四」

36頁下段24行目 〔注106〕に追加。ちなみに、徐勣については、市原亨吉「徐勣年譜稿略」（『小治政研究』）に「勣は唐の徐勣の孫」とある。一九七四年

〔杜律詳解〕訳注稿(六)「文化情報学部紀要」第五巻

181頁上段20行目 称したのか↓称したのか

190頁下段13行目 新州に滞り↓「新州」に滞り

202頁上段1行目 〔注4〕に追加。清・顧炎武（一六二一—一六八二）の『日知録』巻二十九、吐蕃回紇の条に「唐の吐蕃は、即ち今の土魯番、是れなり」と。

〔杜律詳解〕訳注稿(八)「文化情報学部紀要」第七巻

135頁下段3行目 〔注17〕に追加。電報は、大スッポンとワニ。

〔杜律詳解〕訳注稿(九)「文化情報学部紀要」第八巻

102頁上段8行目 軍中警嚴之音↓軍中警嚴之音

102頁下段9行目 〔注8〕に追加。明・徐禎卿の例は「沅溪の潘進士、長安に在り。逆旅中、庭下の山丹花を見て其の主詰ふ。云はく是れ沅中より移し来たと。感じて詩を賦し、予に命じて響を嗣がしむ」と題する五絶の承句。ちなみに、荻生徂徠『五言絶句百解』（絶句解）にこれを収め、「自字不字爭故郷相関意」と注する。

106頁上段8行目 趣があるの写し得ている↓趣があるのを写し得ている

109頁下段12行目 〔注15〕に追加。東陽の「夜航餘話」巻上にも「不啻トハ、其段デハナイト云コトナリ」と。

- 110 頁上段12行目 曹・王に方ならぶ↓曹・王に方ふ
 111 頁下段11行目 娛しませるもののに↓娛しませるもののに
 114 頁下段20行目 異なざるなり↓異ならざるなり
 117 頁下段16行目 次の(注28) ↓次の(注30)
 118 頁下段16行目 『秦中歳時記』→『秦中歳時記』
 124 頁下段19行目 「人を送るを言を以てす」↓「人を送るに言を以てす」
 訳注稿(一)「石川之襲「杜律詳解序」の(注一)に挙げた村瀬栲亭の生年については、これを近藤春雄『日本漢文学大事典』などに基づいて延享三年「一七四六」としたが、妹尾和夫『村瀬栲亭』(潮流社、昭和六十二年)に拠って延享元年「一七四四」と改める。

訳注稿(二)「文化情報学部紀要」第一巻の003「城西の陂に舟を泛ぶ」詩の(注8)で錢注(巻一)に引く「通志」について不明としたが、これは明・趙廷瑞編修『陝西通志』のこと。その巻二、土地二、鄂県の条に漢陂について「元末、遊兵水を決して魚を取る。水去りて陂落ちて田と為る」と見える。

訳注稿(五)「文化情報学部紀要」第四巻の028「蜀相」詩の第五句中の「頻繁」の語について、詳解に引く『蜀志』費禕伝以下の用例は、すでに清・顧炎武『日知録』巻二十七、杜子美詩注の条にこれを挙げ、東陽が「唯だ費禕山濤二伝、煩に作る。蓋し後人筆を減じて書する爾」というのも、顧炎武の原注に見える。それに関連して訳注稿(二)の006「鄭十八虔の台州司戸參軍に貶せらるるを送る」詩の第二句中の「老画師」の語について、『旧唐書』閻立本伝を引き「前輩之を恥づること是の如し」というのは、やはり『日知録』杜子美詩注の条に『旧唐書』立本伝の「太宗嘗て侍臣学士と舟を春苑池中に泛ぶ」から「閻外に伝呼して云ふ、画師閻立本」までを挙げるのに示唆を受けたものであろう。

訳注稿(六)の038「所思」詩の(注21)において、「唐は乃ち唐喪」というを、何か基づくところあるのか不明としたが、これは徐増『而庵説唐詩』(巻十七)の「秋興八首」其六に「瞿唐」について、「瞿は二目一佳に従ふ。人艱難に遇へば則ち懼る。懼るれば則ち但だ両目を睜す。(中略)唐は乃ち唐喪、目を見定めて観去れば幾んど將に身を喪ひ命を失はんとす」とあるのに拠っている。

訳注稿(八)の061「將に成都の草堂に赴かんとして途中作有り。先づ嚴鄭公に寄す五首」其五の(注16)において、顧宸『註解』に引く王阮亭について、清の漁洋山人王士禛とは別人であろうとしたが、張忠綱編注『杜甫詩話六種校注』(齊魯書社、二〇〇二年)所収の『新編漁洋詩話』には、これを王士禛の説として

採録している。されど顧宸『註解』の「秋興八首」其八に挙げる王阮亭の説がすでに明・李沂(字は艾山)の『唐詩援』に引かれていることからすれば(陳伯海主編『唐詩彙評』上冊に引用するのに拠る。浙江教育出版社、一九九二年)、これを王士禛の説とするのは失当であろう。ちなみに、『唐詩援』については、孫琴安『唐詩選本六百種提要』(陝西人民出版社、一九八七年。後に『唐詩選本提要』と改題して、上海辭書出版社、二〇〇五年)に解題がある。

なお、訳注稿(九)の衍字や脱字については、原田憲雄氏や杉下元明氏から御教示いただいた。

(二〇〇九・八・二〇初稿)
 (二〇〇九・二・一九補筆)

にのみや・としひろ／文化情報学部教授
 E-mail: ninomiya@sugiyama-u.ac.jp